

代、麥酒の泡の沸騰時代に於て大飛躍を試み、以て、一攫千金の壯圖を企てねばならぬ。此の時代を經濟界の暴風雨時代と云ふのである。日清日露の兩大戰役の前後は、謂はゆる其れである。茲に重複を顧みず、最近の事例を擧げんに株の最も下落せしは明治三十七年の始め、日露宣戰布告の當時である。それから以後、漸次、騰貴して、三十八年に及んだが、同年秋、ポーツマス談判不結果の爲め、株は忽ち暴落を來した。三十九年には更に騰貴の勢を示したが、同年十二月から四十年一月にかけて、騰貴の絶頂に達した。此の間に於ける株の値幅を考ふると、三十七年の開戰當時に株を買つて三十九年の十月頃に此れを賣つた其の幅と、三十九年の十月に株を買つて、同年十二月に此れを賣つた其の幅とを比較して、後者の三ヶ月間が、却つて前者の三年間よりも廣かつた。随つて其の利益の大であつたことが知られる。然れども、更に之れよりも甚

しかつたものがある。四十年一月の發會に株を買つて、同月十八日に之れを賣つた其の幅は僅かに十五日間に於て、前者三ヶ月よりも、一層廣大であつた。乃ち短日月の間であつても、株式の熱狂時代に投じて、策戦を誤ることさへなかつたならば、如何なる大成功でもなし得らるのである。されば此の暴風雨時代に於て好機を攫まねばならない。

潮流に因つて生ずる大波を達觀せよ

投機に精通せる或る外人が云つた。曰く、投機に三様ある。今日買うて明日賣る者、是れは海上の漣を見る人である。漣は何人にも豫測すべからざるが故に、運命に任かすの外はない。次に、今日買うて三ヶ月後に賣る者、是れは風の爲めに起る波を見る人である。風の方向を考へなば、波の變動を豫測

することが出来るが、風其の者が不確實であるから、正確なる豫測は望むことが出来ぬ、然るに、今年買うて三年後の好機會に賣る者がある。是れは潮流に因つて生ずる大波を見るやうなもので、何人も、正確に、之れを測り知ることが出来る。相場に志す者は、一日、一月の小波に頓着せず、三年後の大波を達觀せねばならぬと。蓋し、實に、至言と首肯せねばならぬ。

歐洲の戦争開始以來、我が日本の經濟界は非常に有利の地位に立ち、從來の輸入國は、一躍して輸出國となり、正貨は増加し、金融は緩漫になり、諸株式の價格は甚しく騰貴し、日露戦後の黄金時代を再び現出した有様であるが、今後、當分は、此の勢ひを持続するであらうと思ふ。否な、まだ、眞の株界の白熱戦は是れからである。前途は遠い、今日は、熱狂時代の第一歩に在りと謂つてよい。株界の英傑兒は、睡手一番、大に奮起すべきである。併しなが

ら、熱狂時代は、成功の容易なると共に、失敗を招くことも、亦た、速かであるから、此の風雲に乗せんとする者は、深く内外古今の事跡に鑑み、潜思熟慮、十分に研究を積んでかゝられんことを望む。

東株八百圓是れ天の聲

財界の晴雨計たる東株(東京株式取引所の株)は、言ふまでも無く兜町の花形株である。之れには舊株と新株との二つがあつて、舊株は五十圓拂込券で新株は十二圓五十錢拂込券である。共に其の日々に於ける變動は著しいものである。此の東株が、日清戦後に一度八百圓の高値を顯はしたが、其の後財界不振の打撃を受けて、之れを天井として漸次低落し、三十四年中には百七圓の安値を示し、更に其の後、漸騰の勢ひを辿つて、日露戦後の有名なる熱狂時代に入

つて、ます／＼沸騰し、四十年の一月中旬の如きは、七百八十圓と云ふ最高潮に達した。然るに、大反動の襲來と共に、再轉して、忽ち低落の歩調を取り、翌、四十一年中には、遂ひに九十一圓三十錢に奔落し、これを以て底入れになつたと記憶して居る。尙ほ爾後、四十三年に二百四十五圓二十錢の高値を現したが、大正三年七月歐洲大戰亂の勃發するや、最近の安値たる百四圓と云ふ相場を出し、それが底となつて、また／＼、騰貴し始めて、昨年の十二月には五百圓に垂々とする相場を維持して居つた。即ち天井と底との値幅は七百圓であることが知れる。而かも、將來、或は、極端なる強氣の豫想せるが如き一千圓の珍値を現出せないとも斷言は出来ない。何はあれ、投機株としては、此の株ほど面白味のあるものは他に無いのである。試みに、東京株式取引所の創立當時に、百株を所持して五千圓を拂ひ込み、二十九年中に於ける六百五十八圓の

高値に賣り、由りて得たる六萬五千八百圓で以て、三十四年中に於て百七圓の安値を見せた時、六百十株を買ひ取り、更に、四十年中に於ける七百八十圓の高値に賣り拂へば、合計四十七萬五千八百圓を收め得べく、差引四十七萬五千八百圓を利得するわけで、五千圓の資本で四十七萬圓を儲けたことになるのである。

誰れか言ひけん、東株八百圓、是れ天の聲なり、福の神の託宣なりと。二度あることは三度とかや、何時かは又々八百圓と云ふ相場が出るかも知れぬ、イヤ出るであらう、此の株位面白い大賽コロは、ウォール街でも餘り見られぬ代物であらう。

株で損する輩は無類の馬鹿

元來、株式市場に於ける相場の高低なるものには、自ら一定の形式があつて、常に一上二下して定まらない小波動の中にも、一定の時期が来れば、必ず、大波動を起して、天地の轉覆るほどの大變動を來すのが普通である。故に、平素、此の機會を窺ふことを怠らずして、日毎の小波動には、決して、眼を呉れてはならぬ。委しく説明すれば、初め、二十圓の株が、翌日には三十圓に騰る、と思ふと、其の翌日には、二十五圓に下落すると云ふが如き場合に、三十圓に賣つて二十五圓に買へば、差額五圓の利得を見る次第であるが、之れは小心翼翼たる小才子のやることであつて、斯くの如き足許の小競合には關係はず、遙かの遠方に眼を注いで居なくてはならぬ。が此の小競合が、なかく六ヶ敷いもので、失敗者の多くは此れに基因して居る。株式界第一流の商店の人々でも、盛んにドデンをやる。相場に種々な見越しを附けて、或は高くなる

とか、或は安くなるとか、何とか彼とか、様々に工夫を凝してドデンを打つては能く失敗をする。必勝を期する大丈夫は、決して、こんなところに眼をつけてこそ、ツイてはならない。買へば常に買ひ一方、賣れば常に賣り一方と言つたやうに遣つて、日々、上下する相場には深く意を用ひず、其の大局にのみ見當をつけて、例の大波動の來るのを待つて居るがよい。たとへば、二十圓のものが三十圓に上らうと、十五圓に下らうと、更らに關せず焉で、之れは結局百圓に上る時期が來ると見たならば、一年でも、二年でも、三年でも待つて居るのである、さうすれば、前にも言つた通り、相場は、一定の形式の下に動くものだから、たとひ、百圓に見込んだものが百圓にならずとも、それに近い九十圓とか八十圓とか、又は、飛び越して百十圓とか百二十圓とかになる時が、屹度來る。其の機を逸せないで、買ふなり賣るなりしてしまふのである。畢竟

二六〇
 するに、頂點は此處だなど見極めをつけることが大切である。然れども此の邊のゴツアヒは、各人の頭腦と才氣に任すより外なく、到底説明の限りでない。が、誰れしも、神でもなく、佛でもないから、此の頂點を寸分間違ひないと云ふ譯には行かない。例せば、百圓までは上騰するであらうと思つて居たのが、百三十圓になると云ふ場合、初めの見當が百圓であるところからして、百圓と云ふ聲を聞いた時に賣つてしまふと、それが二十圓も高くなることがあらう。又た、始め百圓と見越して居ても、中途から百五十圓と見越し更へをして居ると、百三十圓までは上つたが、それ切り、百二十、百十と下りはじめることがある。こんな時には、頂點を見損つたのであるから、百二十とか百十とかになつた時に思ひ切つて手離してしまふのである。百圓を見越したのが、七十圓臺八十圓臺で下落しはじめた時でも、同じく此の通りである。過去の歴史を見る

と、大波動は、大抵、二年か三年毎には必ず一回は来て居る。彼の三十七年二月、日露開戦と云ふ聲が掛かると、諸株は空前の大暴落を始め、郵船株の如きが五十圓臺に下つた位であるから、他の株は推して知るべしで、株式界は大恐慌を來したが、戦争の終局に近くにつれて、漸次、上騰し、四十一年一月には例の暴騰期に入り、一躍、一千萬圓の大盡となつた鈴木久五郎のやうな男さへ出たのである。此の間を計算して見ると滿二ケ年である。それから四十年の春頃から、此の反動として次第に悲況に赴き、四十一年まで回復の曙光を認めなかつた。此の間が同じく二年ばかりである。何はあれ二三年毎に一回づつ、大變動の來ることは殆んど疑ふ可からざることである。彼の伊勢の大富豪故諸戸清六は「五朱に賣つて、七朱に買へ」と云ふのが、其の株式場裡に立つ時の憲法であつたと云ふことである。誠に尤もな話して、何でも、五朱の利があると思

れば賣り、七朱の利があると見た時に買へば、先づ大した違算はないやうである。要するに、小刀細工が最も不可であつて、常に大局に眼を注いで、買ひとか賣りとかの一方に固まる——換言すれば強氣とか弱氣とかの中の何れかに決めて動かぬと云ふところが眼目であつて、臆て是れが投機必勝の戦法である。一體我輩に言はせれば、株位分かり易いものはない、之れで損をする人は、よく／＼の盲目である。而して世の中と云ふものは、丁度投機市場のやうなもので、傍から見ると、理由なしに上つたり下つたり、宛で熱病患者か、子子の如きものである。人氣とか氣配とか、ワ、と云へばワ、と言ひ、彌次と稱へるか、浮氣と呼ばうか、一定の信念を缺いて居る態が最もよく判かる。

株式投資は利殖の早道なり

月給生活する者が、五百なり千圓なりの蓄財をなしたる時、之れが利殖に就いて、最も有利なる方法はと云はゞ、多少の危険を冒しても、株を買ふべしである。今時價の五十圓の株を銀行に入れて金を借りんか、少くとも三十五圓、中には、四十圓の金を融通して呉れる。そこで、三十五圓借り得ると見て、差金十五圓を足せば、五十圓株を一株手に入れることが出来る。されば、一千圓の現金ありとすれば、五十圓株を六十六枚、即ち三千三百圓を買ひ得るのである。而して、株の配當を假りに八朱とすれば、二百六十四圓の利が生ずる。銀行の利を同じく八朱と見積つても、株の配當で、優に、之れを支辨し得るのである。かくて、五十圓の株が、若し、六十圓に騰つたとせば、一株に付いて拾圓づゝの差が出る。都合六百六十圓の利益になる。反對に、若し、一株に付いて十圓の下落を見たとせば、六百六十圓の損失となつて、はじめの資金一千圓

は三百四十圓に減する道理であるが、株を抵當に借りる金の利息は、其の株の配當で埋めて行く事が出来るから、暫く回復の機会を待てばよい。尤も經濟界の情況により、甚だしく低落の結果、資本以上に損失の嵩む時は、決斷的態度に出なければならぬ。それで此の方法は、堅實主義一方の人には適せない。従つて萬人に推奨すべき途ではないが、利殖の早道としては、之れに過ぐるものはないのである。されど利益の多いだけ其れだけ、危険も伴ふと云ふ所以を覺悟せなければならぬ。

株式投資八則(其の一)

株式が、投資物件としての特長は、其の賣買取引の甚だ簡便容易なることであるが、注意せねばならぬ事は、株式界が景氣づいて來ると、一般に、割安物

割安物と狙つて、從來は餘り定期に上らぬやうなものに、買氣が集まり、それが、更に勢ひを増して來ると、單に現物の仲値(頗る不確實なものもある)は分つても殆んど年中賣買の對手の無いやうな株を掴むものがある。之れは大いに避くべきことであつて、若し、何かの場合に、いざ賣らうとしても、捨て値でなければ何處でも買つて呉れず、銀行でも、こんな物を擔保としては容易に金を貸さうとはせず、結局は大損失を忍んで、賣り放さなければならぬことになるのである。大資産家なれば兎も角、然らざる者は、資金の全部を斯かる融通範圍の狭き株式に投資するのは深く戒めねばならぬことである。それならば、如何にして對手の多き株を見附けるかと云ふと、取引所の定期賣買に上つて居る株式は、概して、取引が容易となつたものであるが、毎日「出來不申」の看板を掲げてあるものも少くない。故に定期にかゝつて居るからと云つて、一概

に、賣買が容易であると速断することは出来ぬ。大體、日々の取引相場欄を見て居れば判るし、信用ある現物店で相談しても直ぐ判る。

其 の 二

會社の設立が古ければ古いだけ、成績なり、内情なりが多少想像も出来るから、それに依つて將來を判断し卜知することも出来難くはないが、新會社と來ては、目論見書以外に頼るものがないから、若し誤つて此れに引懸つたら最後手痛き目に遇ふから、迂濶と新會社に手を出してはならぬ。たとひ、如何に有望と目ざされても、開業すれば、一割でも二割でも配當すると云ふやうなことを麗々しく並べ立て、此れを餌に勧誘されても、決して、輕々しく手出し、てはならぬ。泥んや、事業の餘り香ばしくなき者に於てをやである。すべて、

創立目論見書通りに順潮なる徑路を辿つた會社は、是れまで殆んど皆無である
と云ふ事を、承知して居らねばならぬ。

其 の 三

會社の未拂込みの株には、容易に手を出してはならぬ。彼の主要な會社の新株が、舊株に比して利廻が低くなつて居るのは、未拂込み金に權利が附いて居るからのことである。即ち夫等の會社の新株は、拂込みが來れば、親株同様に權利が附くから、時機を見て買ひ取るのも可いが、ボロ會社の未拂ひ込み株には、斷じて手を出してはならぬ。株の價は安くなる、拂込みは取られるで、折角の資金も巻き揚げられてしまふやうなことになる虞れがあるから、深く警戒しなればならない。

其 の 四

會社事業は、會社の株主が實際に經營するものでなく、すべて取締役と云ふものに委任して居るのであるから、其の取締役たる、即ち株主等の代理者たるもの、性質手腕については、大いに注意せねばならぬ。代理者の性質手腕は、自ら會社の經營振りに顯はれて來るが、確實なる人なれば、營業方針が又た堅實であるし、山氣の有る人なれば、何んなに立派な成績を擧げて、内部には、必ず遣り繰り算段があるに違ひないのである。重役たるものは、無論、自分が經營して居るのであるから、會社の内情や、其の前途は最も明瞭に分つて居る譯けであるから、其の重役が、率先して持株を賣り放す如きは、甚だ怪しむべきである。例へば大日本製糖株式會社の重役が更迭した際、舊製糖の重役

其 の 五

が持株を叩き賣つたなどは、後の騒ぎを暗示したものと見る可きものである。猶ほ、後藤毛織會社は後藤恕作を中心として創立された會社であるが、前年株式會社に改めた當時、後藤の持株は、元と二千五百株であつたものが、千五百株に減じて居たなどと云ふ如き例が、甚だ珍しくはないのである。

會社によつては、純益が、拂ひ込み株金の一割にしか當らぬものを、一割二分の配當をすることがある。之れは、純益の不足を前期繰越金で補充したのであつて、甚だ眞面目を缺いた處置と言はねばならぬ。云ふまでもなく、繰越金は、未だ處分せざる利益金であつて、純益減の場合に處分するのを悪いと言ふのではないが、一面、準備金たる性質も有るのであるから、勝手に處分す

るのは戒むべきことで、配當が平均を得る位の程度に止めて置くべきものである。それから、配當率であるが、決算期によりて率に動きのある會社は、必ず内政が苦しいからである。配當率は、無闇矢鱈に人氣に投することなく、期毎に、年毎に、増加の傾向あるものを最も可しとする。但し彼の最近に於ける戦時利得に基く各會社の増配は、例外と見なければならぬ。

株式の最近の配當金を時價に割つたものを利廻りと云ふ。即ち、配當率が時價の何割に相當するかと云ふ事を示すものである。之れは何に依つて昂くなり低くなるかと云ふと、會社の収益力で決まるものである。されば、配當率は、いくら好くとも、會社の内情が悪ければ、利廻りは高く、反對に、配當率は低くても、會社の實質さへ確實であれば、利廻りは安いのである。故に、利廻

りの高いものに投資せんとする場合には、餘程、熟慮したる後にあらざれば、斷行すべきでない。但し、安全とか、危険とか云ふ念を離れて、損徳の勘定詰めでのみやるならば、高利廻りのものにも歡ぶべき利得あり、低利廻りにも必ずしも當てにならぬものがあると云はねばならぬ。

其 の 六

株式に投資するには幾種にも分割して投資するを可とする。是れが萬全の策である。解り易く言へば、投資の保險法とも言ふべきもので、歐米の投資家はズツと以前から既に此の方法に依るの有利なるを認めて居るのである。殊に、英國の如きにあつては、地理的分配の投資と云ふ事が行はれて居つて、之れは倫敦市場で、世界の證券が取引されるのを幸ひ、英國公債千圓、日本公債千圓

支那公債千圓、伯刺西公債千圓と云ふ割で買ひ受け、萬一、伯刺西の公債が下落しても日本の公債の騰貴で相殺すると云ふ具合式で、全體の差引に於て市價と利子との平均を保ち、投資の安全を期するのである。此の見解からして、我國でも、若し、瓦斯ばかりとか、電氣ばかりとかに投資するならば、東京、大阪、朝鮮と土地を分けてすべく、又た、同一地内にある株式事業に投資する時には、可成、其の土地の保險、紡績、銀行と云ふ鹽梅に、種類を分けて買ふのが安全である。さうすると、或る株は下落をしても、他の株の騰貴したもので埋合せをつける事が出来るのである。但し日本では經濟組織がまだ幼稚であるから、分割投資にも十分の注意と巧妙とを要するのである。

其 の 七

株式の賣買の時機なり見方なりに就いての一般的通則としては、

- 一、外國貿易の順逆
- 二、農作物の豊凶
- 三、金融市場の繁緩
- 四、財政状態の良否

の如きものである。併しながら此等の状態が、一旦新聞紙上に顯はれた時は、最早、遅いので、顯はれない以前に、不斷の商況から、順逆を推測しなければならぬ。大藏省から、毎十日目には貿易表が出る、又た月報も出る。之れも同じく、出てしまつてから後では、一向に役に立たないのである。貿易表に載つて居る正貨の出入は、内地金融界の大勢を支配するものであるから、商品の出入よりも重要なもので、特に注意して置く必要がある。それから正貨の

出入を豫め知り度いと思ふのならば、正金銀行あたりの外國爲替の變動に注意して居ることが肝要である。それに注意して居れば自然にわかるのである。農作物では、米作を主とする。之れは、農商務省の豫想が發表されるが、之れも發表されてからでは最早遅い。毎年七月頃には早稲作柄の見當がつくから、それを見た上、天候の具合も併せ考へた上で豫測するがよいのである。此の豊凶は外國貿易にも鐵道の收入にも大いに關係するので、真相を極めることは甚だ困難である。だが、内地商況の好、不好で、大體の見當はつくのである。その他、日本銀行の週報や、手形交換所の週報も、平素見落してはならぬものである。それから、財政狀況である。大藏省證券や、公債の募集される時には、大概、金融市場は壓迫されるから注意すべきである。之れに反して、剩餘金の多額なるは、大いに人心を強くするものである。尙ほ此の頃では、政界

と財界との關係が、甚だしく密接となつて來たから、政界の雲行きも、亦た、注意を怠つてはならぬ一要件である。兎に角、左の標準で賣買をすれば大過はなからう。

- 一、財界不況、商工業の收入大いに減退し、市價低落甚だしく、更らに、人氣回復の様なく、次第く崩落して、實價以下になつた時は、株式買ひ入れの最好時機である。
- 二、株界の好況時機となり、さほど動機なくして、市場倦怠、厭氣投げを起した時は買ひである。殊に、數日間、或ひは、數週間打續いた時は、買ひに最も好き時である。
- 三、財界の順況なる歳に、恐慌時にでも起りさうな下落のあつた時とか、一度び、回復した相場が更に再び下落したと云ふやうな時は買ふによい。

四、すべて、何んな會社の株式でも、事業の景氣立つて、收益の増加した時配當率を高めんと云ふやうな企てがあると、其れに先き立つて、市價が騰貴するものである。随つていよく決定した曉には、一度は必ず反動安があるものなれば、其の反動安の時期を見て買ふがよい。

五、市場久しく沈靜して振はなかつた時に、市價、動きはじめ、特に、取組高の増加する形勢のあつた時は、迅速に買ひ建つるがよい。

六、久しく高値に持合ひ、或ひは、急激に騰貴した株式には、如何なることがあつても、飛びつき買ひをしてはならぬ。

七、久しく實價以下に下落を續けて居つた株式が急激に騰貴した時、其の株には先づ見込みはあるものと認めて差支へはないが、何れ、急激の騰貴に伴ふ反動安は必ずあるものなれば、しづかに、其の時を待つて買ふがよい。

八、事業の成績、良好でなく、思はしき配當も出來ぬやうな會社にして、増資、或ひは社債を發行する意思ありと知らば、決して其の株式は買つてはならぬ。

九、整理改革を斷行せんとする會社の株式は、整理案の發表されるのを待つて、之れを調査し、確かに有利なりといふ見込みのついた後でなくては買つてはならぬ。

其 の 八

凡そ、株なるものは、現物賣買にせよ、定期賣買にせよ、巧みに之れを利用しなければならぬ。現物賣買の手續は、甚だ簡單で、且つ、利殖を計るにも、極めて、安全なる最良の方法である。扱て、經濟界の狀況、銀行又は會社の

内情等を探索の上、何々の株を買つて見やうと思ひ立つたとするか、先づ有力なる現物店を選び、手紙、電報、或ひは、電話なりで、注文するのである。さうして買ひ取つた株式が、元より時々昂騰低落は屢々あることであらうが、其の際持株が甚だしく低落の虞れがあると思つたならば、定期取引を利用して、定期取引所へ之れを賣つて置くのである。乃ち期日が来たならば、該株券なり公債をば、其の儘、渡して置いて、後日、一層安値を生じた時、更に買ひ取るのである。かうしたならば、賣買の差異、即ち値開きを利益し、各自の財産損失を補ふことが出来るのである。

有價証券投資の巧拙

「自分は有價証券を以て、最良なる投資の目的物であると思ふ。第一、取扱

ひに手数がかゝらぬ。収益が多い。確實なる証券を選んで投資すれば、危険の虞れが殆んど無い。のみならず、土地の如き纏つた資金を要せない。僅かな金で運用が出来るのである。

土地や家屋を取扱ふには、差配人を置かねばならぬ。時々、修繕をせねばならぬ。やれ賃料の取立、やれ何だ斯だと、種々の面倒な手数を要するが、有價証券ならば十萬圓、百萬圓、三百万圓、いくらでも、別に番頭を置くことも要らない。自分一人で容易に取扱つて行くことが出来る。即ち、一冊の臺帳を作り、それに、有價証券の種目員數と、配當期とを記入して置けば、何月何日に配當が取れると云ふことも、明確に分り、且つ、配當期になれば、其の會社から一々通知して来るから、何等の面倒も、手数も要つた譯けのものでは無いのである。

又た收益の點から言つても、土地からは、平均五分に廻るところは甚だ稀れであるが、有價證券になると、五分以上のもの多く、一割以上の株主配當をする所も少くはないのである。確實一方の點では、有價證券は土地に及ばぬやうであるが、同じ有價證券でも、公債のやうなものになると、安固なことは土地に決して譲らないのである。少しの危険もなく、且つ手数もかゝらぬ。尙ほ、土地は何時でも思ふまゝに賣買されぬと云ふ不便があるが、有價證券である、何時でも思ふまゝに、賣買される便利がある。随つて投資の目的物としては、まことに、最良のもので、有價證券ほど、簡便にして有利なるものは無いと言つても差支ない。

諸會社中には、歐洲大戦亂の爲め、其の餘裕を蒙つて、利益を増加せるもの多く、海運、化學、工業、紡績、石油、製紙、製糖の如き、皆、現に、一昨年

の下半年から本年の下半年にかけて、甚だしく其の收益の増加を示して居るもの、中の顯著なるものである。而して金融は稍々緩漫の状態を脱し、金利は多少昂騰の趨勢に在るとは言ふもの、一面には外國貿易は依然として順潮を示し、軍需品は多額の注文を引きついで受けるし、海運業も未だ尙ほ活躍の舞臺にあり、爲めに、今日既に我が海外正貨は、六億圓を越えた有様である。今後も幾分か増加の傾向を有つて居る。凡そ資金を投下するには、時機と品種とを選ばなければならぬが、今日の場合は、寧ろ買ふべき最好の時機であらう。

一概に有價證券と云ふも、其の中には、いろいろの種類があつて、公債もある、社債券もある、株券もある、縣市公債もある。さうして株券と言つても、數十年前に設立された舊會社の株券もあるし、最近に創立された新會社の株券

もある。性質の上から區分しても、銀行株があるし、工業株があるし、保險株があるし、海運株、其の他がある。又た工業株と言つても、紡績株があるし、瓦斯株があるし、電氣株があるし、染料株がある。此等の枚舉に違のない澤山な種類の中で、抑も如何なる種類の有價證券が、最も、安全有利であるかと思はるに、安全の點から言ふと、公債、縣市公債、社債券、普通株券と云ふ順序である。

公債は債務者が一國の政府であつて、縣市公債は、債務者が縣又は市であるから、安全なることは説くまでもない。社債券は會社の發行する債券で、債券所有者は、會社の普通株主よりも會社の財産に對して、優先權を有つて居るから、萬一、會社が破産しても、普通株主よりも先に債務の辨済を受ける權利があるのである。

それから、收益の點から言ふと、株券、社債券、縣市債公債と云ふ順序である。公債は確實であるだけそれだけ利率が一番低いのである。従つて、安全第一を望むならば、公債を買つて置く方がよいが、利益の多きを望むならば、株券を買つて置くに限るのである、併し、株券の中にも、確實なる善い會社の利廻りの好い廻りも、亦た、極めて好いものも多いから、確實なる善い會社の利廻りの好い株券を買つて置く方が、公債や、縣市債を買つて置くに較ぶれば、遙かに割徳であると言はねばならぬ。

千差萬別、多種多様の株券に對して、如何なる株券を選びて投資すべきかに就いては、なか／＼困難なる業ではあるが、先づ大體に於て、左の四大標準に據つて選擇すれば、大過はなからう。

一、新しき會社の株よりも、舊く創立された——即ち年數を經過した舊會社

の株の方が、會社としても基礎が鞏固になつて居るから、投資するにしても、此の方が安全である。

二、會社の經營者が如何なる人であるかと吟味することが肝要である。經營者の人物如何は、直ちに會社事業の盛衰と重大なる關係があることは、前によく述べて置いた通りである。

三、會社の内容如何を、詳密に調査することが必要である。此の方法はいろいろあるが、一番簡單なるは、其の會社の最近二三年間に於ける決算報告書に就いて、其の貸借對照表、損益計算、利益分配等の状態を比較研究して見ることである。そうすれば會社事業の消長、財産状態の良否は、自然に了解が出来るであらうと思ふ。

四、如何に會社の基礎は堅固でも、將た確實なる株であると言つても、利廻

りが良くないと割が悪いから、最後には、此の利廻りの如何を算定して、比較的利廻りの多きものを買はねばならぬのである。

そこで、現今、如何なる株が、最も安全確實であつて、且つ利廻りが好いかと云ふと、相場の變動は常がないから、一概に斷言は出来ぬが、大正六年九月下旬の相場を根據として算定すると、船株では、郵船株よりも東洋汽船株の方が利廻りが好く、工業株では、鐘紡よりも富士紡が利廻りが好く、銀行株としては、第一銀行は五分弱の利廻りになつて居る。保険株は、相場が餘り高いので、利廻りが極めて好くない。が將來有望な株としては郵船株、紡績株、(鐘紡、富士紡) 化學工業株、製糖株 (大日本製糖、臺灣製糖等) 大日本麥酒株などが、其の部類に屬するもので、その他、石油株も、將來有望であると察せられる。

投機の危道を踏まず、確實安全なる利殖法としては、取引市場にて定期當月限りの相場と、先き物の相場との差額の多いものを選び、賣りと買ひとの二つの約束をして置き、其の間の利鞘を利するのである。例へば、當月限りの其株を五十圓にて買ひ、先き物を五十二圓にて賣約定を爲し、月末に其の株を引取り、先き物約定の期末に其の株を渡し、二圓の差額を得るのである。所謂利殖若しくは日歩取と稱するものが是れである。又た財産の一部を確實安全に利殖する方法としては、或る株券から得る二期の利益配當金を全部銀行に貯金し、其の一株を買ひ得る額に達した時、更に確實有利なる株を購入し、此の方法を幾度となく繰り返して所有株を増加するのである。之れは石橋を叩いて渡る的安全なる方法である。」とは伊藤幹一氏の説くところである。猶ほ鞘取に關しては、次ぎに掲げられてある。

安全有利なる株の鞘取

更に中野武營氏は曰く「世間の人は銀行に金を預ける。銀行では利息を拂つてやる。銀行なるものは、必ずや、此の拂つてやる利息以上に、より多くの利息を取る事を、此の預つた金でなさねばならぬ。保險會社の如きも、集まつた保險金を寝かして置いては、會社が立ち行かぬ。何等かの方法で、極めて有利に運轉せねばならぬ。之れを他に貸附けるにしても、然し、幾十萬圓、幾百萬圓と云ふ大金を、さう容易に、確實なる貸附けがされるものではない。殊に確實を尊べば尊ぶ丈け、貸附けの範圍が狭くなるものであるから、貸附け得られぬ多額の遊金が出る。此の多額の遊金を、如何なる方法で有利に運轉するかと云ふと、それは株式の鞘取りである。他人から預かつた金でもつて、銀行が

株式の鞘取りをすると聞いたなら、誰れしも危険がるであらう。銀行に預ける人の中には、株を買ふのが危険であるからと云ふので、利益は薄くとも安全なる利殖法をと云ふので、特に、銀行に預けて居る人もあるであらう。其の銀行が株の鞘取りをすると聞いたなら、自分が株をやるよりも更に甚だしく危険視するかも知れない。併し、それは杞憂であつて、株式の鞘取りなるものは、決して危険なものではなく、投資法としては、確實安全なるものである。株の相場は、當限よりは先物が高い。で當限を買つて先物を賣る。當限は、今月受渡しをするものであつて、中物は其の翌月と受渡しをするものである。先物は、翌月受渡しをするものであるから、一寸と考へれば、當限から先物まで、三ヶ月かゝるやうであるが、當限は、今月の末に受渡しをするので、其の時より翌月までなれば、期間は六十日である、そこで、當限と先物と兩方の値段を比

べて、其の鞘が幾らあるかを究め、安い當限を買つて高い先物を賣り、利得が手數料其の他を引いて、六十日間の日歩幾らに廻るか、それを實際に算盤珠を弾いて計算する。計算して、銀行利子よりも利廻りが好ければ、其の鞘取りをやるのである。銀行でも保險會社でも、貸付け以外、盛んに之れをやるので、決して危険な方法ではないのである。

鞘取りは、行つた其の日に、賣買した値段が極つて居るから、決して間違ひはないのである。又た之れは、株の種類を吟味撰擇するにも及ばぬので、唯だ鞘さへ多ければよいのである。如何なる商品でも、品物となると、其の仕入れたものが、必ず高く賣れるとは定つて居らぬ。それどころか、商品に罅が入つたり、ローズが出来るのである。中には、全然賣れないでしまふものもある。ところが、此の鞘取りになると、最初、買ふ時から賣る時の値段が分つて居る

のみならず、賣れぬと云ふ掛念がなく値段に變動を來たすと云ふこともない。利益は初めから、チャンと分明つて居る。且つ仲買人に對しても、取引所が保證して居る。之れほど確實安全なる投資法は決して無いのである。されば、それを行つのは、單に銀行や保險會社のみでなく、大資産家、大實業家と言はれるほどの人は、悉く行つて居るのである。注意すべきは、信用ある仲買人を選ぶことである。

株の投機と秘傳

先頃仲買人を廢業した小池國三君は「投機に秘傳なるものがあるかと問はれたならば、自分は言下に、「投機に毫も秘傳なし」と答へるに躊躇せない。全體世人は動もすると投機には何か極意秘傳でもあるかのやうに考へて居る者がある。

が、此れは大なる誤解であつて、株式取引位公明正大なる仕事は恐らく他に求めることは出来まいと思ふ。何となれば、總ての取引きを一定の公開市場で競賣するのであるから、其の取引きは何うしても公平ならざるを得ないのである。世人は何故か、兎角投機てふ文字を毛嫌ひする傾きがあるが、之れはスキュレーションと云ふ文字の意味を正當に理解して居らぬのである。よく眼を開いて見ると、世間一切の事は、總てが投機でないものはないので、何事でも成功したと云はれるほどの者は、何れも皆な好機に投じて斷行されたものである。現に歐洲の大戦亂の如き、武器による投機である。力と機略の遣り取りである。今日、兜町で行はるゝ投機は、平和市場に於ける戦ひであつて、是れ、亦た、力と機略との戦争である。力のあるもの、機略に富んだ者が、大勝を得るのである。是れ位に、公明正大なるキビくした男性的な仕事は、復た

と天下にあらうか。斯く云ふと、株式賣買には、餘程の力即ち金力と、餘程の機略即ち駆引が要るやうに思へるかも知れぬが、それは勿論、金と駆引のない者には出来ぬが、決して三井三菱安田等の如き多額の資産を有しないのである。駆引、即ち、機略と云つても、敢て、必ずしも、信立、謙信、張良の如き深慮遠謀をも要しないのである。現に歐洲の戦争でもさうである。兵士個々に就いて見れば、相變らず目二つ鼻一つの普通の人間である。唯だ其の普通の人間の集團が敵となり、味方となつて戦うて居る處に、偉大なる戦争が實現されるのである。扱て、株式市場の戦ひと言うたら、賣りと買ひとの二つに外ならぬのである。多數の集團が賣りと買ひとの二派に分かれて勝負を争ふ處に、相場が生れるのである。之れを行なふ人は、賣りと買ひとの何れが勝者なるかを見分けて、随意に味方を選び、之れと行動を共にすれば可いので、戰場に於け

る兵士と異なる點は、彼等は軍需品、即ち兵器、彈藥、食糧、其の他、一切のものを軍總司令部から供給され、勝敗も總司令部の責任であるが、株式市場では、各人自己で、軍需品一切を支辨せねばならぬと共に、勝てば、則ち軍功を己れ一人で懐に收め、負ければ則ち、自己一人で戦死するのである。彼れは團體的で、此れは個人的である。株式の面白き點も、此の個人的に出来ることとありと謂はねばならぬ。即ち各人の分に應じ、夫れ々々相當の利分を得ることの出来る點にあるのである。

如何なる人が株式で儲け得るか

如何にせば株式で儲け得られるか、如何なる人であつて株式で儲け得るか、之れには秘訣がある。と言つて開けて悔しき玉手箱の類かも知れぬ。兎に角、

世間で一人歩きの出来る程の人ならば必ず誰れにも儲けられることであつて、如何にせばよいかと云ふと、何んでもないことである。聞いて見て、何んのことだと諸君は笑ふかも知れぬ。併し乍ら、其の何んでもない事を、兎角世間の人には行はないから困る。實行し得る者の少ないのが、自分は誠に遺憾なのである。さらば其の株式で儲け得る者の資格はと云ふと、實に次に掲げた二要件あるに外ならぬのである。

一、必ず一定の職業を有すること

二、其の職業収入より不用の金を貯蓄し得ること

何人でも一定の職業を有して居つて、他人に依頼せず、身分相應の収入を得ることは、最も必要なる事で、今更ら暇々を要せぬ次第で、人たる者は、一定の職業、収入があつて、はじめて、獨立獨行して行けるのである。之れと同じ

意味で、株式場で儲け得られる者の第一の資格は、獨立獨行の人たらねばならぬのである。獨立獨行し得る者ならば、所謂人間到る處に青山ありで、何處へ行つても成功疑ひなしで、株式賣買を行つても、亦た成功疑ひなしである。併しながら、それには第二の要件たる不用の金を貯蓄し得る力量のある者でなくてはならぬのである。

不用の金の貯蓄といふと、少し無理な注文のやうに聞き取れるかも知れぬ。誰れにだつて不用の金の有らう道理がなく、否や、それどころの嘆きでない、入用の金が無いからこそ、株式でもやつて儲けやうと云ふのである。人を馬鹿にするにも程があると言つて、怒り出す人があるかも知れぬ。けれども、まあ辛抱して暫く聞いて貰ひ度い。

諸君、よく考へて御覽なさい。不用の金は決して無いやうなものであるが、

苟くも獨立獨行して行ける人であつたら、何人でも、使はんで済む金が、幾らかはある筈である。敷島を一箱十錢出して買ふ所を、八錢の朝日で済ませば二錢の餘裕が出来る。氷水を飲むところを麥湯で我慢すると云ふ風にすれば、塵も積つて山となるで、一年二年三年の内には、百圓とか二百圓とかの金が出来て来る。百圓と云ふと一寸大金のやうだが、一日十五錢づゝ、儉約すれば、一ヶ月四圓五十錢、一ヶ年五十圓、二ヶ年で貯蓄することが出来るのである。それで十年一昔と云ふが、十年位は早いものである。其の十年間に五百圓の金を残すは何んでもないことだ。少し意を込めて儉約すれば、十年間に千圓を餘す位は、商店の小僧だつて出来るのである。此の五百なり千圓の金の出来る人が、即ち株式で儲け得らるゝ資格のある人なのである。

更に今度は如何なる人が多く失敗するかと見るに、人より美麗なる着物を着

たがり、人より美味いものを食べ度い爲めに、株式でも行つて見やうと云ふ人が其れである。全體、前にも云つた不用の金なるものは、他人様が、美衣美食に費すところを貯蓄すれば、其の金は別に必要とも云はれぬ次第であるから、まあ、不用の金と言つたので、其の金を以て、見込みのついた株式を買ひ、時機を待てば、儲かること、請合ひである。今日は、株式が高くなつたと云つても、銀行に預金するくらゐの利廻りより高い株は、幾らでもある。預金利息は間違ひなく貰へるには相違ないが、株式の如く營業の成績次第で増配當をする。と云ふやうなことは決してない。兎に角、他人より樂をして、他人より美味いものを食べて、他人より美しい着物を着て、それで金儲けをしやうと云うやうな蟲の善い考へで居る人に、金の儲かる筈は斷じてないのである。それで金儲けが出来るやうであつたら此の世の中は闇の世の中であると言はねばならぬ。

他人の能はざる忍耐があつてこそ、他人の出来ぬ金儲けもあるのであるから、報酬は、それに伴ふ働きによつて定まるのである。されば、勤勉、敏捷、英斷と云ふ如き、所謂る處世上の美德は、株式市場に於ても、缺く可からざる要件でなければならぬ。

株主は此の心掛が大切

會社事業の破綻を救済する策としては、先づ第一、重役なるものは、全然相場と云ふものと絶縁せねばならぬ。それから、相場師などの自由にされぬやうに、會社の經營を堅實に行つて行くといふことが最も必要なることである。元來相場なるものは、濡れ手で粟を掴まうと云ふやりかたなもので、眞個、事業其の物を樂しんで細く長く着實にやつて行かうとする主義とは相容れぬもので

ある。即ち、配當を多くして株が高くさへなれば、積立金は何うでも可いといふやりかたでは、決して、會社の基礎は鞏固に保たれないのである。第二には株主の心懸けを改め行かなければならぬ。世間には、自分で自分の財産を守ることは、甚だ上手でも、株式事業に投資したもものになると、一向、冷淡で、餘り注意を拂はぬ人が多いやうである。併しながら、株式事業に投資したもものになると、實は、自分の財産であるから、十分に此れを守らねばならぬ筈のものである。然るに、今日の株主を見ると、徒らに配當の多きを欲して、會社の内情の如何などには、甚だしく無頓着である。積立金などは更らに構はずして唯だ、もう、配當金を多く取らうとばかりして居るやうである。是れは、甚だ悪き心懸けで、淺間しき了簡と言はねばならぬ。會社の積立金を十分にして、其の基礎を益す堅實に行つたならば、自然、株の値段も騰貴するに違ひな

く、自分の財産も亦た、随つて殖えて行く譯のものである。此の點は、株主たるものが、大いに反省せねばならぬ點である。尙ほ、株主と呼ぶもの、中にも、投資を本領とする眞の投資家と、鞘取りを主たる目的とする不眞面目なる投資家とがあつて、此の不眞面目なる投資家は、配當の多からんことのみに腐心する輩であるから、之等の株主即ち相場に手を出すやうな株主と共に、斷じて事業を經營すべきでない。何うか將來は、株主が然う云ふ精神で投資せんことを切に望んでやまぬと、財界の一名士は語つた。

年七割以上に廻る債券投資

如何な勘定高い人でも、年に、四百五十圓の金が三百五十圓の利を産むと聞いたら、一寸、首を傾げるであらう。即ち、一百圓額面で、六百圓以上して居る

日本銀行株の如き、利廻りを換算すると、三分九厘にしか廻らない、郵船、鐘紡、満鐵等の花形株でさへ、一割以上の利廻りを見ることは、到底、不可能のことである。人の生血をすゝると云はれる日濟貸すら、二割以上に算盤はとれないのであるから、そんな器用な商賣があるものかと冷笑するかも知れぬ。しかし、實際に於て、年利七割八分、日歩に換算して二十一錢三厘九毛(百圓につき)の利子を産まして行けるのであるから不思議なことはないのである。加之それが投機的なものでもなければ、不確實なものでもない。内職にも出来るし婦人にも出来るし、安全で、高尚で、加之も、必ず四百五十圓なればならぬと云ふのでもない。四十五圓でも出来る。それは何んな方法かと云ふと、勸業貯蓄債券の賣買で、一口に言へば、債券の鞘取りである。今假りに四百五十圓の固定資本としての利殖法を述べて見よう。

貯蓄債券賣買値段には、其の貯蓄債券の抽籤月までに、必ず、三十五錢の鞘
 即ち高低がある。これは、何うしても、それ丈の幅を付けなければ、仲買所
 が、營業上、利を見て行く事が出来ぬ最低限度のものである。尤も、いくらか
 の高低は有つたとして、之れ丈の鞘でなければ、賣買標準を作ることには出
 來得ないのである。一例を挙げると、△號貯蓄債券十二月末日の賣り値段が四
 圓五十錢して居たとして、それが、二月一日の買ひ値段が、四圓八十錢となつ
 て居る。即ち、一枚の債券で、十二月末日に買つて、二月一日に賣れば、三十
 五錢の利が得られる。此の故に、百枚買つて置けば、三十五圓の利を得る譯で
 ある。而して、買ひ取つてから、其の値段の出て来るまで、即ち、資本を寝か
 して置く間は、僅かに三十三日間しかないのである。一年三百六十五日を三十
 三日づゝに切り上げて行けば、十一回丈、此の方法を繰り返す事を得るので

ある。而して假りに之れを十回だけ、巧みに繰り返せば、前に言つた通り、四
 百五十圓が三百五十圓の利を産むのである。

茲に、最も注意すべきは、利鞘を取つてから、直ちに、次ぎの債券を買ひ込
 む事である。抽籤してしまつた債券は、直ぐに、最低値段に發表されるかど云
 へば、決して、さうでない。抽籤月の翌月は大低利渡し月となつて居るから、
 最低値段に十五錢（即ち額面に對する三分の利）の利札丈は割増しになつて居
 るから、それ丈、値を高く見積らなければならぬ。だから、其の債券であ
 つたならば、その翌月か、或ひは、その翌々月に買ひ入れるのがよい。い號
 からを號まで、十二種類ある債券であるから、順繰りにそれを繰り返すことは、
 少し馴れて來て吞込んでしまへば雜作はない事である。尙ほ抽籤は年に一回と
 二回との二種があるからして、直ぐに買ひ入ると半年或ひは一ケ年間背負ひ

込んで居なくてはならぬ。それでは何んにもならない。利を見たところで七割以上を産ますと云ふことは到底出来得ないであらう。

要するに、抽籤の前々月買ひ入れると云ふ事を忘れてはならない。参考の爲め、一ヶ年間を通じての之等營業者の廣告を切り抜いて考へて見るのも可からう。債券によつては三十五錢の利鞘もあれば、三十錢のものもある。時には四十五錢位な折もある。平均三十錢に見ても、七割の利を産むことは確實なるものである。單に貯蓄債券ばかりではない、勸業債券でも矢張り同じ理窟である。此等の詳細は「債券利殖秘傳」(牛込田町同仁社發行定價金三十五錢)に詳しい。

定期米の思惑亦不可ならず

近來相場とか投機とか言へば、直ぐに兜町なり、北濱なりを聯想する位に

世人は株式市場に向つて深甚の注意を拂ふやうになつた。それだけ此の米相場と云ふものは、一般人に輕視されて居るかの觀がないでもない。併しながら、日本に於ける相場は、始め米相場から源を發して出來たもので、随つて其の歴史も古く、且つ相場らしき相場——最も投機の妙を發揮して居るのは、此の米相場であると思ふ。それに何れかと言へば、相場師として成功した者は、寧ろ株の方よりも米の方に多いやうに思はれる。古き例は措くとしても、近頃でも此のことを證據立てる材料は隨所に在る。

されば、急行列車の客となつて、早く目的地に到達せんと欲する上からは、此の米相場を利用することも慥かに一策である。それで、次ぎに少しばかり著者の經驗を基礎として、成金たるの方法を研究して見よう。

其の前に一寸斷つて置くのは、一體相場と云ふものは、必ずしも米に限らず

株でも糸でも皆な然うであるが、全くの素人が、書物や雑誌などで、學んだのでは、却々本當の様子が悟了されるものでなく、例令相當の知識素養ある言はば斯道の先輩から授けて貰つても、逆も腹に呑み込める譯のものではないのである。之れは仕うしても、多少の月謝を拂ふつもりで、一回だけは是非實地に小規模ながらも試みるべきで、さうすれば、賣買の方法や術語等は、直ぐに分かるようになる、だから、茲には賣買の方法を教へることの煩をば避けることにした。

さて近來の如き期米界に波瀾の最も激しい時には、一躍、風雲に駕して大富豪となること云ふことは、決して、難事業ではないのである。世の中に、貧者たる者は、絶對に富者になれぬ者としたならば、貧富の懸隔はますます大きくなつて、貧者は自暴自棄となり、國力にも大なる影響を來たすことであらう。彼

の危険思想を懐く社會主義者と云ふやうな者は、或は此の時に於て漸く出で來ることであらうと思ふ。然るに、一方から見ると、此の期米市場は、貧富の懸隔を調和して行く機關であつて、知らず／＼國家の安泰を致して居るものであると、誰やらがメートルを上げて居たが、一理ある話である。

ところで讀者が、期米市場に馬を馳せて、輸贏を争はんとする時、先づ第一に必要なものは、商略である。商略なるものは、戦争に於ける戦略で、商業上最も必要なものであるが、特に、投機界にあつては、一層、其の必要なことを感するのである。彼の、漫然、朝に買ひ夕に賣つて、一定の見識なき徒輩は到底、成功し得るものではないのである。一度び高しと見て買建てたものが、十錢切り引かされたとして、周章狼狽して手仕舞ひ、又は、ドデン賣越を爲すなどは、何時も少しづつ、損失ばかりして居つて、結局るところ、資金を投げ捨て

てしまうものである。大勢を達観して居つて、四邊の事状をよく考察し、一旦斯うと商略を決め、機を見て居つて、賣買進退したならば、成功しまいと思つても成功しないでは居られないのである。然らば、商略を決定する材料は如何にして得るか云ふと、次ぎの諸項を翫味され度い。相場は活物であつて、素より一定の標準を以つて窺ふことは六ヶしい、今度の物價調節令の如きは、殆んど豫期せざりし材料であるから、宜しく臨機應變の奇策を用ひなければならぬ。

三三

一、先づ相場と云ふものは、毎でも大勢に従つて、高下するものであつて、其の大勢なるものは、左の四項目によつて觀察するがよい。

(イ)人口の増加

(ロ)外國産地の趨勢

(ハ)通貨の膨脹
(ニ)生活程度の向上
二、其の年々に就いて云ふと、前年よりも下落を誘致するのは、大抵、次ぎの諸項目が原因して居るのである。

(イ)古米の多少

前二三年が豊作であると其の年が不作でも割合に騰貴せぬものである。

(ロ)米作に直接影響すべき事情の發生せる時

例へば、風の害、雨の害、旱の害、冷氣の害、蟲の害などの發生した折のことである。

(ハ)米作に間接影響すべき事情の發生せる時

例へば、米穀關稅の改正、又は、廢止、農作法の改良等

三三

(ニ) 麥作の豊凶

(ホ) 米の實際の豊凶

(ヘ) 麥作に影響すべき事情の發生せる時

例へば、風の害、水の害等

(ト) 外國米輸出入の多少

(チ) 流通貨幣の増減

(リ) 爲替相場の高低

(ヌ) 運賃の高低

(ル) 世の中の景氣不景氣

(ヲ) 正米の移動

三、併しながら、最も有力なる事情はと云ふと、農家出米の如何である。日

本で、米穀需要の實際は、農民と市民との需給關係であつて、即ち田舎と小都會、小都會と大都會との關係である。例へば、假りに東京で、一年間に二百四十萬石の米を需要するとすると、一ヶ月平均二十萬石づゝの米を入れねばならぬ。然るに、供給地である田舎に於て、出米の都合、運賃の高低に關して、月々規則正しく入米するものでない。それゆゑに、他に米價を動かすほどの大變動なき限り、此の入米の多少によりて、米價は高低するのである。此の出米は、十月から翌年の五月頃までが最も多く——内十二月一月が特に多し——其の後は次第／＼に減じて行き、米價も之れに比例するのである。四、七、八月から、翌年の一月頃までの高低は、米作の如何には關係せず、二月三月頃から、五月六月頃までは麥作の如何に依つて決定する事が多いのである。とは言へ、決して、他の經濟狀態を無視して居てはならぬこと勿論で

ある。

商略の要害は、先づ大略、此くの如きものであらう。併しながら、賣買の
 駆引は、ツマリ戦争の駆引であつて、堅い道ばかりを踏んで行つて其れで良
 かと云ふと、そればかりでは成功するものでない。時には虎穴に入らなければ
 虎兒を得ない事もあるのである。最も必要なるは、機敏と云ふことで、此の機
 敏を缺いでは、到底、勝利覺束なしと云つても可い位である。凡そ、以上述べ
 た諸項目で、期米界の趨勢を察し、騰落の見當を立てたならば、眼先きの小動
 搖には心を奪はれず、一意、將來の高低を達観して一大勝利を博すると云ふこ
 とに意を留めねばならない。或る期間を見越して賣買をする時は、其の間に、
 多少の動搖あるは自然の數であつて、古人が常に戒めて居るのもこのところ
 である。眼前の小動搖に頓着するやうでは、到底虎穴にも入れず、虎兒も得ら

れぬのである。それから、商略てふものは、たとひ、之れに馴れなくとも初
 めから自己の商略を立て、輸贏を争ひ奮闘するのが得策である。

商略に次いで、必要なるは、勇氣である。勇氣は膽力と云つて説いた方が
 よいかも知れぬが、此の勇氣即ち膽力は、何事にあつても必要なることではあ
 るが、殊に、期米界に雄飛せんとする快男子には、此れがなくして雄飛が出来
 るものでない。一度び、見込みを立て、賣買を試みたならば、泰然自若として
 自己の見込み通りに來るのを待たねばならないのである。相場の事であるから
 何うかすると、數十日も保合ふ事がある。此の時、待ち遠しくなつて、賣買を
 手仕舞ひ、又は人の言に迷うてはならない。然るを、時機が來もしないに、無
 暗に、賣り買ひを試みて、僅少の高低に心を奪はれて一生懸命になり、其の度
 毎に損失して、大後悔を残す如き人は、此の時機を待つてふ勇氣即ち膽力が無

いからでなければならぬ。

であるが、一旦、見込みを立てた後には、一刻の猶豫なく、賣買を始めるがよろしい。殊に人氣が強くて相場は此の上何程騰るか判らぬと云ふ様な場合に賣方となり、或ひは反對に人氣も弱く、相場も此の上、何處まで下落するか知れぬと云ふ時に、買方となるのは非常に六ヶ敷く、却々素人には出来難い藝當ではあるが、こんな場合は、得て相場轉換の期で、即ち天井か底かに近い時であるから、人氣に逆うて賣買する時は大利益があるのである。多くの人は此の時、相場を追うて賣買するから大失敗するのである。こんな時には大々の勇氣が必要である。本間宗久翁は、「米、段々上る時は種々の強き原因申立猶々上げ人氣も強く我も買氣に成候節、火中へ飛入思切にて賣方に付くべし、極めて利運なり」と云つて居る。又た「米、段々、下る時、色々弱き風聞出て人氣

も揃へて弱く何程下るも知れ難く吾考も弱かるべしと思ふ節極めて買場なり此時思切海中へ飛入心持にて、甚だ成りにくき者なれども、其節疑心を生せず極めて買ふべきなり。」と云つて居る。要するに、期米界で雄飛し、大成功を爲さんとする者は、商略と勇氣との二者を具備せねばならない。決して其の内の一を缺いでもならぬ。

終りに斯界の成功者として名高き右本間宗久翁の訓言を列挙して、讀者の參考に供しよう。

本 間 翁 訓 言

- (一) 米商ひは、踏出し大切なり。悪き時は、手違ひになるなり。又、商内進み急ぐべからず。急ぐ時は、踏出し悪きと同じ。
- (二) 賣買共、今日より外商場なしと進み立時、三日待つべし。是れ傳也。

篤と米の通ひを考へ、天井底の位を考へ賣買すべし。

三、賣買共に思入れ進み候ふ時は、今日より外商場なき様に思ふものなれども、是れは、功者ならざるが故なり。幾月も見合せ、通と運びとを考へ、慥なるところに付出すべし。

四、年中、商ひ手の内にある時は、利運遠し。折々、手仕舞して休み、見合せ候ふ事肝要なり。

五、買米ある時は、始終、強氣張るものなり。又、賣米ある時は、弱氣に片寄るものなれども、此の時、自己の存意を捨て、三位傳に任すべし。

六、商休むといふも、賣買を止め、休む心にては、甚だ宜しからず。一分の氣の抜けぬやうに心掛け、商ひ仕掛け可申ことなり。

七、買に付時は、其の間の狂ひ、高下に構ひなく、百俵上を的として、通ひ

の下げ目を買重ぬべきなり。又、賣に付く時は、其の間の通ひ高下に迷はず、益す、賣重ぬべきなり。

八、天井後の下相場は、三四ヶ月以上、引續き下るものゆゑ、賣主義を立て益す、賣重ぬべく、底より起上がる相場は、數ヶ月引續き上るものゆゑ、片買の立場を極め、益す、買乗せすべし。特に、底の買落ちにならば、猶ほく買ふべきなり。

九、前年賣方にて利運せる人は、兎角、弱氣に傾き易き者なれども、新米出初めたる節は、前年の氣を斷然離れて見込を立つべきものなり。

十、米も弱く、人氣も弱く、我も、亦、賣りたき時は、心を轉じて、買方に廻るべく、又、米も強く、人氣も強く、我れも、亦、買ひたき時は、極めて天井なれば、心を轉じて、賣るべし。要は、人、西に走る頃、東に走れば、極め

て利運なり。然るを、人の戻る頃、後れ馳せに、西に走りては、何時も利を得難し。

三六

土地は極めて確實なる投資物

株式界の繁昌した後に來るものは、乾度、土地熱である。蓋し土地熱には、三つの内容がある。即ち

- 一、株式で儲けたる成金等の土地に投資すること。
- 二、各種の投機に失敗した人が、金に困つて土地を賣り放すこと。
- 三、土地熱の勃興するにつれて、都會の近郊に住居して居る豫後備の軍人等が、現に所有せる土地を高値に賣つて、安い土地に買ひ更へて、移住するの傾向を來すこと。

目前、一時の利益を得ると云ふ點から見ると、株に投資するのは、土地に投資するのよりは、優つて居ると謂はねばならぬが、永遠の利益を目的となす點から云ふと、土地に投資する方が、遙かに確實安全であつて、且つ、有利である。即ち、土地は収益を急がぬ資産家に適し、株は目前の利益を欲する人に適して居る。併し乍ら、眞に安全にして有利なる點から論じたならば、株と土地とは、到底同日に談すべきものではない。否な殆んど比較にならぬのである。株を有して居れば、利益も大に、又た確實でないとも言はぬが、一朝、誤つて墮くと、元金までも捨て、仕舞はねばならぬことになるが、土地となると、供給にも、自ら限りがあるし、世運の進歩に伴ひ、國富の増殖するに連れて、いよゝゝ、ますます、騰貴し、特別の場合を除いては、先づ、下落と云ふことの虞れは無いのである。故に、極めて、確實有利なる投資法は、土地に投資する

三六

ことであらねばならぬ。

さて土地と株と、何れの投資者に從來成功者が多いかと云ふと、土地の方が遙かに多数の成功者を出して居る。株の投資者中には、株の暴騰によつて、一時に大資産家となつた者があるには違ひないが、一時、大成金になつても、永續する者が甚だ稀れである。成功者と云ふ方から見ると、到底も、土地投資者とは較べものにならぬ少数である。

ところで、現今、東京に於ける最大なる地主は誰れ〜であるかと云ふと、三井、三菱の兩大關を度外にして、尾張屋銀行の持主たる峰島氏、次いで、舊藩主たる諸華族であらう。峰島は、もと、公債類の確實なる有價證券にはかり投資して居つたが、今より三十年前、明治二十年頃から、投資の方針を一變して、土地を買ひ始め、今日では、市内ばかりでも、十數萬坪の大地主となつて

居る。土地の暴騰によつて、其の資産を十倍にも二十倍にも殖やしたことは、世間の既に周知する所である。市内の山の手では、丹本氏が、成功者の筆頭であらう。渠は維新當時、數多い土地を捨て値同様に買つたのが、大に成功の土臺をなしたのである。故に、當時、先見の明あつて、土地を買つて置いた人々は皆な今日大資産家となつて居るのである。

此の財産程度の人に適す

斯くの如く、土地に對する投資程有利にして安全なるものはないが、併しながら、土地投資法の短所とでも云ふ可きは、あまり僅少なる資力を以てしては到底、投資するを得ない事である。先づ、少くとも、五萬圓以上の資産家であらなくてはならぬ。其の五萬圓以上の資産家で、細い利で満足して居る事の出来る

人であらねばならぬ。目前の収益の多きを望み、それで生活せなければならぬ種類の所謂小資産家は、確實なる株とか、公債とかに投資する方がよいのである。

云ふまでもなく、土地は、大體に於て、價格の不廉なものであるから、小資本家の投資物には適して居らぬ。とは云へ、場所によつては、安い土地もあるから、若し、其の有する金は、目前の収益がなくとも可いと云ふのならば、斯くの如き土地を買つて置くのも可いであらう。だが、何れかと云へば、一千圓程度の金しか有たぬと云ふやうな人ならば、住宅を建てた方が、寧ろ、割徳であらうと思ふ。

惟ふに今日は土地の投資をなすに最好時機であらうと思はれる。全體土地の騰貴は何時でも、株の騰貴の後から來るものである。今や諸株は大暴騰をなし

爲めに、時ならぬ巨利を占めた資産家が多いから、此等の資産家は、其の餘れる資金を、必ずや、土地買ひ入れに投することゝなるであらう。現に數ヶ月以前から見ると、約一割見當の騰貴をなした。更らに地方の土地も、米價の昂騰するに伴れ、爾來相應の騰貴を示したが、近き將來に於ては、軍需品の賣却、貿易の順潮、海運業の發展等の爲めに、正貨はますます流入し、金融はいよいよ緩漫となるから、漸次、土地に投資する者の増加と共に、價格は騰貴さるゝことであらう。

然らば、今後、投資すべき最も有望なる土地は、我國で、先づ、何處等邊であらうかと云ふと、將來、發展せんとする工業地であらう。東京附近で言へば工業用地となるべき川筋——川崎、深川、本所、芝、大崎、王子邊であらう。市外の住宅地として有望なるは大塚、澁谷、目白、目黒、高田、田端、大崎、

巢鴨等で、池上も交通機關さへ完備すれば、有望である。又た羽根田、森ヶ崎は水道の便さへ出来れば、是れ亦た有望である。

地方に在つては、大阪、神戸、京都、名古屋、九州では門司、若松、北海道では小樽であらう。

次に土地に投資するに就いて特に聲を大にして注意すべきことがある。それは外でもない、左の二點に過ぎぬ。

一、資産全部を決して土地に投資せぬ事。

二、思惑を爲しては危険である事。

土地は、動かし難いものであつて、即刻、資金の入用な時には、株の如く、自由の利くものでないから、財産の半額を土地に投じ、他の半額を有價證券にして置くのが、最も安全なる方法であらう。

それから土地は——株も同じことであるが——就中、土地に至つては、猶ほ更らの事、決して無理算段をなしてまで思惑買ひをしてはならぬ。抵當に入れたまで土地を買ふと云ふ事は、甚だ戒むべきことであつて、餘つた金があつてはじめて、投資すべきものである。抵當に入れて、思惑買ひをなし、高利に追はれて、財産を蕩盡した人々の例は決して乏しくないのである。是れは、株に於ても慎むべきことであるが、特に土地に於ては、一層、戒慎せねばならぬことで、何んなことがあつても爲してはならぬ。

土地騰貴の趨勢一斑

市街地が如何なる程度に於て騰貴の趨勢を辿りつゝありやを検することは、興味ある問題である。而して明治二十九年以降の市内に於ける土地賣買價格、並びに明治四十二年及び大正二年の評價價格比較表を左に掲げた方が便利であ

るけれども、餘り數字上の計算を列べるも、妙でないから、茲には省略するが唯だ市街地が、一定の期間に於て、可成り確實に騰貴しつゝあると云ふ所以を承知して置いて貰へば、それで宜しい。

土地は、前にも述べし如く、収益の確實なものであつて、特別なる場合を除くの外は、一定の年限を経過せば、屹度、騰貴疑ひなしであつて、下落すると云ふ事は無いのである。人口は年々増加し、一面供給には限りあるものであるから、原則としても、土地は世運の進歩に伴うて、其の価格は騰貴すべき筈のものである。

續へつて前項に、東京市内に於ける土地騰貴の趨勢に關し言及したが、市内は二十年平均に其の価格を倍加し、又た市外地に在りては、十年平均に二倍の暴騰を示しつゝあるのである。所謂る収入物と稱する土地に放資すると、平均

四分以上五分程度の収益があるのである。収入物とは、貸地用の土地を云ふので、これ等の土地は、市内に散在して居るのである。而して貸地料は、特別な場合を除いては、下落すると云ふことはなく、一定の期間を経れば、必ず騰貴する一方であるから、將來の収益も自ら増す道理である。一方には、十年毎に價格の騰ると云ふ楽しみもあること故、土地に投資するは、甚だ有利であらう。

子孫に遺す資産として上乘

歐洲戦争の開始當時は、金融が一時逼迫したが爲めに、土地の価格は、平均二割方下落したが、大正四年以降は、再び元に復した。將來は、大いに騰貴すること疑ひなしである。併しながら、此れを、株式の價格、及び其の他の諸物

價に比べると、權衡がまだ取れて居らぬこと著しいと云はねばならぬ。諸株式現今の相場をもつて、此れを戦前に較べると、二倍にも三倍にもなつて居るし、其の他の物價も、之れに準じて大いに騰貴して居るのである。然るに、獨り土地ばかりが騰貴しないと云ふ道理は、決してないのである。確實有利なる此の土地ばかりが、さう永く此の儘で安價の地位に居る筈はない。必ずや早晩、大いに騰貴するに決つて居ると保證を附してよいのである。されば、土地投資は、今日を以て最好時機とせねばならぬ。

思ふに土地は、子孫に遺す資産として、最も適當なるものであらう。之れを賣却せんとするには、煩雜なる登記の手續を要するし、又た、株のやうに、買手が自由でもないから、自然と、財産の安固を保ち得るのである。曾にそれのみならず、土地の相場は、時に下落することありとするも、大體に於て、下落

の憂ひがなく、年を追うて、漸次、騰る一方である。されば何んぞ云つても、土地ほど安全確實で、永遠の収益を目的とする投資に適したものはないから、子孫に遺す財産としては、恐らく之れに越すものは、斷じて、ないと言はねばならぬ。

山林と耕地との投資

之れまでは、都會に於ける宅地の投資に就て、主として述べて來たが、此れ以外に、山林及び耕地に對する投資にも、頗る有望なるものがある。決して見捨つべきものではない。此の點より見ると、北海道よりも、朝鮮の如き所が投資の目的地として、大いに望みを屬すべき最好の土地ではあるまいかと思ふ。殊に、朝鮮の如きは、主として、小作料の徴收を眼目とするものであつて、相

當、調査の上で、土地と收穫の關係如何を考へ、安値のものを購求すれば、容易に、七八分以上の利廻りが得られるのである。又た、北海道の如きにあつても、同じく、有利であることは、吾人が屢ば聞くところの事實である。而して特に多くを期待されつゝあるものは、未墾地の或るものであらう。それで、若しも、既墾地を求めんとするならば、氣候及び地味などの關係を調査の上、北海道よりは、寧ろ、朝鮮の三南地方が、反つて有利であらうと信すべき理由が多々あるのである。

つて内地に於ける耕地はと見ると、元來が、價格の變動の少ないものであつて、宅地投資によつて得られるやうな利益は、到底、得らるべき見込みはないのである。最も安全と云ふ點に於ては此の上なしであるが、特別なる抱負を以て自ら耕作に従事すると云ふが如きにあらざれば、大なる見込みは無いと謂

はねばならぬ。

山林は、耕地よりも、幾分、有利でもあるし、且つ、便利である。それは、何故かと云ふと、第一に價格が安い。地租も安い。のみならず、小作人を雇ふの要もなく、他人に托して作つて貰はずとも可いからである。現に、知名の人で、稍や、大規模に、植林事業を經營して居る者が、大分有る位である。それで、萬一、鐵道工事でも起るとか、其の他の大なる建築物(工業場の如き)で建設になると云ふ時になると、木材の需要が、急に起るから、之れを伐採して賣つても山は依然として損するものでないから、復び樹木を植ゑ附けて、前途を樂しみ得るのである。

若し夫れ、内地であつて耕地と山林と何れが有利であるかと云つたならば、一言の下に、山林を以て有利なるものと答へる。然し、是れは、最早や多少樹

木の成長したものに就いて言つたので、新たに殖林しやうと思へば、利を見るまでには、相當の年數を待たねばならぬ。

紐育土地の真相

茲に亞米利加とは云つても、主として紐育の市外に於ける地所の投資に就いて、聊か話して見度いと思ふ。先年來、新聞、雑誌の廣告欄に、紐育土地建物株式會社（又一方日米興業株式會社創立事務所の名義を用ゆ）なるもの、廣告を見る機會が少くないと同時に、此の廣告に就いて、一般投資家の間にも多少の注意を拂はれるやうになつた傾きがある。而して、一方に於ては、此の紐育土地建物株式會社々々長たる岡本米藏を目するに一個の山師を以てし、此の會社を、一種の泡沫會社なりとすると共に、此の海外地所に對する投資を

危険視する者があるかと思ふと、他の一方では、邦人としては未曾有の壯圖なりとして、非常に稱讚する者もある。然るに茲に辯護士にして法學士たる福島一郎及び同じく柳栖喬と呼ぶ二人があつて、本年初夏の頃自ら彼の地に於て、實地踏査を遂げ、其の結果を東京朝日新聞に通信したが、其の所説に據ると、所謂將來の日本東京の三菱原たるの目ある紐育市外の地所は殆んど無價値のものであるとのことである。

而して我輩を以て之れを見る、當該會社が、一種のスペキュレーションを試みつゝあるもので、社長岡本が、また、一種の大賭博を行ひつゝあるものである。山師と云はれても結構である。たとひ、萬一、不幸にして、失敗の悲運に遭遇したところで、日本男子の壯圖として愧づ可きことでないと思ふ。捨て、はならぬといふ小資本しか持たぬ人は他の方面に投資の途を求めがよいが、

捨ても可いといふ金のある人は、大いに彼を讀めて、曲れに投資し、債券の
一等當籤を樂しむぐらゐの考へで、十年、二十年の將來を待つのも善からうと
思ふのである。

貯金する金で家を建てよ

自己所有の家に起臥するのは、借家住ひよりも第一氣持が好い。故に前にも
一寸と述べたが、金儲けをする算段以外に相當な資産のある人であれば、家の
新築費に對する金利などを、兎や角う云ふにも及ばぬが、餘り餘財のない者が
若干の貯蓄を利用して更らに金融の工面をなし、家を新築するとしたならば、
それは建築の爲めに借り入れる金の利次第で、若し利が安ければ、建てた方が
利益であらう。それならば何の位の金利の金を借りて可いかと云ふと、從來の
借家賃が何の位の利廻りになつて居るかと云ふ事を調べる必要がある。

例へば、店子は、大家のかけた建築費の元利金を、月々支拂つて住ひをして居
る勘定であるから、其の利廻り以内の金で借り得らるゝならば、同じ程度の負
擔又は、今少し、軽い負擔で、自己の建築した新しき家に住居される道理であ
る。

而して今日、中の中の程度の貸家建てゝあると、大概、一坪二十五圓乃至三
十圓で出来るのである。それを人に貸す時には、凡そ、一ヶ月、一坪六十圓乃
至八十圓で貸すと見れば、大なる差違はなからうと思ふ。そこで、假りに一坪
三十圓で家が出來て、それが、一ヶ月七十圓で貸せるとなると、一年に八圓四
十錢、即ち、元金に對して二割八分の利益が上がることになるのである。が、
家主となると、其の中の二ヶ月分ぐらゐは、家の保全費、税金、空家となつた
時の準備金として控除しなければならぬので、それを差引いたとしても二割

三分になる。此の二割三分の中から、借地料、保険料、元償償却費を差引いても、尙ほ且つ、純益は、少くとも、年利一割乃至一割三分には十分廻るのである。

従つて此の邊を標準とすれば、一割以内の金利の金を借りて建てるのならば借家するよりも利益であることが解かる。尙ほ、地面が、自己のもので、其處へ家を建てるのならば、普通、銀行でも一割位で貸すかも知れぬが、借地であつて、單に建物だけではなかく、貸して呉れないのである。土地建物の會社でも一割二分の外に手数料を三分位も取るであらう。現に、比較的金利の薄い勸業銀行なり農工銀行でさへ、とても、建てた家屋の價格全部は貸さない。先づ見積り價格の六分半位までより貸さないのである。であるから、全然、手元に金の無い者が、單に借金だけで家を建てようとするのは不可能の事であらう。

されど、手元に、千圓なり、千五百圓なりの金があつて、其の不足分だけを借りて建てるといふことになるならば、其の金を安い銀行などへと預けて置いて一方に高い家賃を拂ふよりは、非常に有利であると言はねばならぬ。さればそんな金があつた時、此れを銀行なり郵便局へ投げて置くよりは、先づ自分の家を建つた方が得策である。

建築は、其の巧拙に依つて、費用に大なる相違がある。同じ出来上りのものでも、或人は二十五圓で仕上げるし、或人は三十五圓で仕上げると云ふことがあるのは、皆、其の人の建築の巧拙に依るのである。全然の素人である、必要もないところへ手を掛けたり、監督も行き届かぬために欺瞞かされたりするので、非常に費用が掛かるのである。又た、待合のやうに、小さな室を多く作ると、之れも費用が嵩む、堂々たる大きな構への家が、割合に安く出来る。其

の他造作の入れ方、材料の適用の如何に依つて、大いに費用が嵩みもすれば、節約もされるのである。

此の邊の呼吸は、到底素人には分る筈のものでないから、宜しく親切で、正直で、技術の勝れた、信用のある大工に一任してしまふが可いのである。建築費は、一概には言へないが、木造ならば、一坪三百圓ぐらゐ掛つたらば、可なり良いのが建てられるであらう。普通のもので、一坪百圓が上等の方、一坪五六十圓が中の方、一坪四十圓が並みのところであらう。勿論、貸家建てとなるど、まだく、安く建築が出来るのであるが、住宅とすれば、いくら、儉約をしても、坪四十圓は掛けなければ、到底、可なりものは建築し得られまいと左る専門家が語つた。

近來、相當の収入があつて、多少の餘財ある人が、相競うて、自己の住宅を

新築するの風があるのは、まことに、喜ぶべき現象といはねばならぬ。今、左に「住宅建築の有利なる理由」に就いて、星島定次郎と云ふ人が語つた談話を、左に載せて、諸君の参考に供しやう。

今、假りに、こゝに、二十圓の家賃を出して家を借りて居る人が、自分の住宅を建てるとして、扱て、此の人は、少くとも月収は百圓はある人であらう。それで、家族はと云へば、まあ、夫婦に子供一人位と見て置く。さすれば、百圓の月給で、家事萬端の経費を切り詰めて、家賃の二十圓と外に十圓ぐらゐを餘すことは易々たることである。乃ち家賃を合せて三十圓の金が残るとして、夫れを基礎に、家宅を建築にかゝつたとする。

初めから贅澤を云つては、果てしがないから、金の溜まり次第、追々建増しをするとして、最初に、建坪二十坪の家を目標にすれば、此の費用が、坪四十

圓と見て、八百圓である。あと二百圓で、門から塀から庭まで作るとして、都合、千圓と見る。さて、其の千圓が無いので、他から借りて建てたとして、年一割二分の百二十圓、月十圓の利子を取られる。又た地所を五十坪借りたとして坪十錢なら五圓の支出、税金其の他の諸掛りを月に五圓と見て、一ヶ月の経費が二十圓かゝる。之れで、丁度、今までの家賃と匹敵する譯である。ところで、前にすべての経費を詰めて、家賃の外に、十圓の貯蓄をすることにした。そこで、此の十圓を元金の償却に充てるとすれば、一年経てば百二十圓償却されるから、それ丈、一年後には利子が減る勘定で、毎月の掛かりが減少して来る。假りに、毎月、二十圓づゝ拂つたとしても、五年餘で皆済される譯である。併し、勤め人なら、年二回の賞與があるし、商人などなら、不時の収入があるから、其の時に元金を返して置けば、五年で済むものは、四年、又は

三年で返済のされる譯である。

以上は、千圓の全部を借りたとしての計算であるが、従来、二十圓の家賃で住居して居た人ならば、敷金が五六十圓はある。それに、住宅でも建てやうと志すほどの人ならば、相當の貯金も出来て居るだらう、従つて、それ丈借りなくて済む次第で、自然、負擔も軽くなつて来るのである。何れにしても、之れまでの家賃より十圓多く負擔すれば、五年以内には全く自分の物になる。而して、五年経つて自分の所有となつた時は、其の土地が衰微せぬ限り、家の價格は、建てた時より騰つて居る。そこで、望み手があれば、他人に賣つて、自分は、更らに他處へ建て、もよい。又た其の間に金が出来て、他に建てたならば、今までの家を借家としても、収入がある。以上の如く、他から金を借りて建てても決して損にならないのであるから、況んや、自身で金を所持して居

つて、之れを郵便局なり、銀行へ預金して置きながら、借家住ひをする等は、愚なる骨頂と言はねばならぬ。早い話しが金利として見ても、貯金などより遙かに有利である。

小資本家の不動産投資法

一般原則として、土地は高價であるから、資産家の投資に適して居るが、小資本の人、即ち、俸給生活者か何かで、やつと千圓内外の貯蓄があるといふやうな人が、此の千圓内外の金を、有利に不動産の上に運轉せんと欲したならば、これは借家をする代りに、自分の住宅を建てるのが一番の最上方法である。併し乍ら、建築の方法によつては借家するよりも損なことがないでもない。現に、自分等の借家の模様を實地に調べると、家賃五十圓以上もするやうな善

い貸家は、自然、廣い地面を要する故、割に合はないのである。だから割り徳の家屋を建築しやうとするには、安い地面でも借りて、其の上に成るべく金を掛けないやうな建て方をするに限る。さうすれば、十年後ぐらゐには借家したと思へば、家屋丈け儲かることになるのである。

さて、住居地として、郊外と市内と何れが可いかと云ふと、之れは、其の人の境遇によつて決まることで、今、斯うと斷定する事は出来ないが、上流及び下流の人には、郊外が可からうし、中流の人には不便であるから市内がよからうか。上流の人は、自動車なり、自用车なりを利用し得られるから不便なくらゐは何んでも無いのである。下流の人は、不便と云ふことはあつても、家賃が安いから、此方がよからうと思ふ。郊外は空氣も清潔であるし、風景もよいのであるが、中流の人は、活動力を無用の往復時間に殺がれるの不利を免か

れないのである。
序であるから言つて置くが、東京土地株式會社では、一般希望者の需めに應じて、月賦拂ひの方法で、住宅を建築して呉れることになつて居る。それで其の月賦金は、普通の家賃よりは、少し高いくらのもので、五年の後には、其の人の所有に歸する定めであるさうな。併し、一應は調べて見て決するが、安全であらう。

土地家屋投資の標準

土地なり家屋なりと云ふやうな不動産に投資するには、如何なる標準によるべきかと云ふと、先づ次ぎの二點である。

- 一、交通機關の状況。

二、癖の有無

言ふまでもなく交通機關の現に完備し、又は將來完備すべきところは必ず發展する見込みある土地である。土地は如何に良くとも、交通機關の完備せぬところは、發展しても、其の發展は遅いのである。それから、第二の標準は、癖の有無である。悪い癖のある土地や家屋は、買つても利益がないのみならず損になるのである。たとへば、間口が狭くて奥行の長い土地家屋とか、往來の狭い所とか、濕地であるとか、附近が貧民窟であるとか云ふやうなのが、悪い癖のある土地なり家屋であつて、之等は、成るべく避けて、癖のないものを選ぶがよい。それから、商人向きの家屋と、勤人向きの家屋と、何れを買つた方が収益があるかと云ふと、商家は空いても直ぐ塞がり、店が繁昌すれば、十年も二十年も其の家に住居して他に移らないから、此の方が収益は確實と云はね

ばならぬ。

投資の一法たる貸家の建築

貸家の建築は、投資の一方方法として、決して、悪くはないのである、が其の實行に先きだち、其人の職業が、家作經營に適して居るか否かを考へねばならない。例へば、教育家とか、官吏とか、事務家とかでは、到底、借家の世話はして居られまい。又た、主人が暇のある人であるからと云つても、家作經營の才能があるか否かも、自ら反省して見なければならぬ。昔は、三年で元金の回收が出来たと言はれて居るが、今日は、保険の率も上り、税金も高くなり、地代も騰つたので、三年は愚か、五年経つても、下手にやると、回收は覺束ないのである。と云つて、家賃を高くすれば借り手が無い、何處が損んだ彼處が

損んだと言つて借り主は訴へて来る。それを一々大工なり左官なりに高い手間賃を拂つて修理させねばならぬ。費用はますます要るばかりで、そんな時には自分で金鎚を以て行つて繕ふ位の勢ひでなくてはならない。是れ位の事が出来て、且つ前に述べたやうな事に顧慮のないやうな人ならば、低利で銀行へ預金して置くよりも、家を作つた方が遙かに利益である。

そこで、家を作るとしても、何の位の家が、一番、家賃が取り良いかと云ふと、東京市内の住家を標準として、先づ一ヶ月八圓乃至十二圓位の家である。一ヶ月二三圓の家は、早く塞がつて、よいやうではあるが、家賃の上がりがないのである。尤も、ズツと安い一ヶ月一圓二十錢乃至一圓五十錢の家は、又た、甚だ割のよいものであると云ふことである。此等の安長屋に住居するものは、主として、労働者であつて、彼等が、毎日仕事から歸り来る時分を見計ひ

靴を提げて、四錢五錢の日掛けを集めて歩けば、恰も、高利を貸すやうな割のよいものであるさうな。其の代り雨天続きの時は、上りが悪いと共に、場合に依つては夜逃げをされる覺悟もして居らねばならぬ。

猶ほ少し細密な點に立入つて考へるとなれば、一ヶ月八圓乃至十二圓ぐらゐの家は、東京市内であつたならば、其の家の壘一枚につき、山の手で七八十錢下町で一圓位上るものであるから、之れを標準に作れば、好いのである。勿論土地の善悪とか、庭の廣い狭いにも依つて、更らに、安くせねば貸せぬところもあらうし、或は、少しは高く貸せるところもあるから、其の積りで判斷しなければならぬ。

貸家經營をなさうとする人は十分の貯金を有つて居なければ不可能である。若し之れがなければ、一部分を借りて補はなければならぬ。さうすると、先

づ、第一に金主の吟味、第二に地主、第三は差配の三拍子が揃はなければならぬのである。

一體貸家といふものは、全部儲かつたところで一割乃至五分位の利廻りにしか當らないものであるから、高い利の金を借りるやうでは、決して儲からぬ。地所も其の通りであつて、なるべく、地代の安い所を選ばなければならぬ。且つ安心して借りて居られる所でなければならぬ。それで以て、場所のなるべく好い處を選ばなければならぬ。

例せば、東京市内では、淺野侯爵の原宿の地所、土井子爵の曙町の地所の如き、常に地代が安いのみならず、安心して借りて居られるが、現在は建物保護に關する法律もあつて、無茶な暴利を貪ることは出来なくなつて居るとは言ふもの、何時地主が變るか分からぬところであつて、また、法外に地代を取ら

れるやうな所へ家作を持つのは、甚だ不安心な次第である。

ところで此の家の壽命と云ふものが、大抵二十年位のものである。十年位で使用に堪へなくなるやうな極めて下等なものを建築するのは、決して、得策とは云へぬ。却つて損なものである。但し貧民長屋は例外として除くのである。乃ち建築費の割合には高い保険を付け、焼けたらば焼けたで損はなく、平素は一ヶ月一圓二三十錢を日掛けで取り立て、四五年で元を收めて、あとは何うならうと構はないと云ふ風なやり方をすれば、利廻りも高利を貸す如くで可いけれど、これは、別とせねばならない。それで家賃は一ヶ月十圓位上る家を建築するのが、一番有利である。それ以下となつては造らぬ方がよからう。それ以上となつても、三十圓止まりで、五十圓、八十圓の家を建てると、決して引き合はぬものである。そこで、二十年間壽命のある家を造らうとせば、今日の東

京での相場では、何うしても、一坪四十圓位かゝる。此れは、疊建具、一切、附隨させての見積りである。今試みに、計算を分り易くする爲めに、下が二十坪、上が十坪の二階家を建てるとして、坪、四十圓ならば、總建坪が三十坪であるから、此の家は概算一千二百圓で出来上がるのである。そして上下三十坪とせば、間数が六間か、七間は取れ、玄関、湯殿、臺所、椽側等も可なり廣く取れて、貸家としては、まあ、上等の方である。随つて場所がよければ、一ヶ月優に三十圓、場所が、さほど、よくななくても、少くとも二十五圓を落ちることとはなからうと察せられるのである。

次に、七圓、八圓、乃至十圓の家賃の上がる家を建築しようと思へば、一戸に就いて、十坪ぐらゐの家を建てれば可いので、十坪と言つても、上手にやれば、三間ぐらゐの室に、便所、押入れ、臺所等が完備する。猶ほ、十坪で、

一ヶ月の家賃、三圓から五圓ぐらゐの家も建築し得られるのであるが、前にも言つたやうに、壽命の短い家は損であつて、決して得でないから、止す方がよい。此等家賃の標準は、極く大まかなもので、何處までも之れに依つて律して行かうとしてはならない。貸家經營をなさうとする人は、豫じめ考へて置かねばならないのは、家賃と場所とは、甚だ密接なる關係があることである。場所が好ければ、割りに高く貸せるし、場所が悪いと、割りを安く貸せねばならぬのである。

古家と新築と差配人

家作を持つとしても、古家を買ふと、新しい家を建てるのと、何れが可であるかと云ふやうなことも、研究すべき事項である。古い家でも、まだ五年や十

年は、確かに壽命があると云ふやうな家は、安く買つて、相當の修繕を加へて貸すとしたら、經營の仕やうにもよるが、或ひは新しく建てるよりも有利であらうかとも思はれる。併し何にかと面倒は多くかゝるし、古家では、自分に都合の好い場所を選んで建てるといふことも出来ぬから、之れには、相當の經驗を要すると共に、他に事業を經營しつつある者や、勤人生活をして居る者には不適當と云はねばならぬ。

それから、差配人に關して少し話して置き度いと思ふ、何かの片手間に家作を持つとしても、一軒や二軒ならば自分で面倒も見られるが、十軒、二十軒、三十軒と持つやうになると、是非共、差配人即ち監督者を置く必要が生ずるところが、此の差配人なるものが、餘程信頼するに足る人物でないと、思はぬ損失を招くものであるから、大いに注意せねばならない。尤も、現今は、信託

會社に管理を委任する方法もある。それで信託料は、普通に取り高の七分位を拂ふと云ふことである。

貸家經營と地所の利用策

元來、貸家經營は、地所を澤山有して居る者が、其の地所の利用策として、一部分に家を建て、貸すと云ふのが本當で、他から地面を借り、金を借りてまで行くと云ふ事は、數字上の計算は、兎に角、大いに考慮せねばならぬことである。地面を借り、金を借りてまで行くと云ふ人は、これまでの人が、多くは高利貸的の餘り品の良くない人物が多いと云ふ話だ。尙ほ、借りるにしても、貸家を建てる金が、十分、懐にあるが、今少し足らぬと云ふところを借りて建てる位のところでは無ければならぬ。世の月給取りが、假りに、月々二十圓の

預金が出来るとしても、それを利息に廻して家を建てることなどは、一寸と有利のやうに見えるが、聊か考へものかも知れない。其の人が常に順境に在るものならばよい、また、家内も健全で、俸給も昇ると言つた拍子ならば、或は算盤通りに行くかも知れぬが、月賦や年賦で償還して居る間に、地代も拂はなければならぬし、保険料も拂はねばならぬ。五六年すれば大修繕をせねばならぬ。一方に於ては、家内が病氣をする、転職せねばならぬ等と云ふ事情が湧いて來ると、もう失敗に歸することは明かであつて、借金して貸家經營をするに云ふことは、餘程熟慮の上で斷行しなければならぬ。

貸金利殖法

貸金も抵當を取つて貸付けるのでは、安全ではあるが自ら利息が安くて面白

くない。尤も質屋は可成りの高利に廻るけれど、元之れは専門に營業とすべ
きもので、相當の經驗も要れば、又た内職にする譯にも行かない、乃でドウし
ても、高利に貸すところの信用貸金でなければ、豫期の金儲けは出来ない。
然るに此の信用貸しとなると、一途に世間からは高利貸しと言はれ、果ては
蛇蝎の如くに忌み嫌はれるので、普通の人は一寸手が出しにくい。けれども
世評を關はず、遮二無二、金が早く殖したいと焦る人は、やつて見るのも悪く
はあるまい。尤も餘り酷いことはせぬ方が宜しい。

今日普通の高利貸しは、大抵三ヶ月期限で、利子は月五分、外に手数料とし
て一割を取るようである。即ち百圓を借りると、三ヶ月分の利子金十五圓と、
一割の手数料十圓、合計二十五圓を天引きされる。そこで返す時は百圓、若し
延期を乞へば、更に書直して利子と手数料とを加へて行くのである。

又た日濟貸しと稱し、極く少額の金を貸與する方法もあるが、之等の委曲を
述べることは避け、人から指弾もされずに、大意張りで高利貸をするには、電
話擔保貸金と、手形の割引とであらうと思ふ。

試みに手形の割引に就て言へば、今日の如き金利の安い時節でも、尙ほ十錢
位なら、比較的確實な借主が幾らでもある。十五錢乃至二十五錢でも相當にあ
る。若し萬一の危険を覺悟して試みるとなれば、五十錢乃至一圓位までもある
それで假りに十錢にしたら、何程の利廻りになるかと云ふ。

日歩十錢とすれば

三十日間で三圓

一年間で三十六圓五十錢

となるから、之れを元金にて割れば、三割六分強に廻はる譯で、若し貸金で

利殖を計らうと志す人は、此の方法を試みるが一番宜しいように思はれる。尙ほ恩給年金等を擔保として貸付けるのも、却々割が良くて、氣が利いて居ると聞く。

元六

兎も角も、著者は貸金と云ふものに對しては、殆んど經驗がないので、其の邊は切に讀者の諒恕を乞はねばならぬ。

算盤の採れる投機たる出版業

最近二三十年間に於いて、東洋出版界の霸王と稱せられ、富三百萬を積みたる博文館主大橋新太郎及び、先き頃創立二十周年の祝賀會をやつた實業の日本社主にして五十萬の資産を有する増田義一は、共に出版成金の錚々たるものであるが、其の他にも、出版業に依つて、無資産の境地から、能く其の富を築

き上げた連中も尠しとせぬ。乃ち此の出版業なるものは、普通の商人など、違つて、當りさへすれば、随分思はぬ奇利を博し、一舉にして一廉の家産を作ることが出来る。或る都下の有力なる一出版業者は、嘗て著者に向つて、斯う言つたことがある。「出版業は算盤の採れる投機事業である」と。之れは實際を穿つて言である。

併しながら、知識もなく、經驗もなく、素養も乏しき青年が、徒らに空想に耽つて、此の業に指を染めることは甚だ危険で、獨り自己の失敗に止まらず、延いては他にまで迷惑を及ぼすと云ふ結果に了はるのである。

其の他各種百般の業は、遣り方次第では、随分致富の目的を達することが出来るが、一々茲には煩を避けて記さぬ。

元六

第五 現代成金月旦

破天荒の船成金内田信也

「おらも欲しいぞ内田さんの金を……」と鳴戸通ひの櫓拍子にまで唄はるゝに至つた内田信也は、徒手空拳で、僅か一ヶ年間に、五百萬圓を儲けた破天荒の船成金である。

彼は明治三十八年、東京高等商業學校を尻から五番目と云ふ成績で卒業した男であるが、卒業すると同時に、月給二十五圓で三井物産の船舶部に雇はれた。學校時代から彌次の總大將で人ずれがして居たので、實社會の事には、可成り通じて居つた。彼奴、鈍才で卒業したに似合ぬ話せる奴ぢやと云ふ噂は、次第に社内に擴まつて來た。また、内田自身も大いに勉強したが、彼れが船舶

に關する知識を得たのは、全く此の時代に於てゝあつた。

而して三井物産に十年間勤続した後、意見が合はぬと云つて、突然、辭表を提出した。彼れを知るものは、彼れが、今まで折角築き上げた地盤を捨てるのを惜しんだが、彼れには、竊かに期するところがあつた。

彼れは、三井を辭職した翌日、神戸の居留地邊で、事務所向きの空家を一軒借り入れ、こゝに引越して、支那、漢冶萍公司の船舶部に勤めて居た。彼れの先輩にして、友人の間柄なる高木陸郎に就いて、同公司の仕事をやつて居たのである。ところが、歐洲戰亂の勃發と共に、世界の航路が危険視せられ、船舶の相場は、忽ち上つた。彼れは、こゝを見込んで、一ヶ月五千圓の約束で、ジエシタモンから一隻の汽船を借り入れたが、間もなく、之れを七千百圓で他へ轉借した。即ち懐手で二千百圓と云ふ金が、毎月、轉り込むことになつた。更

らに彼れは、自己の持船を五隻も貸し附けたが、始め十六萬圓で購つた一隻の如きは、現に七十五萬圓と云ふ相場に上つて居ることである。目下彼れの所有に係る船は總計六隻、借り船五隻、現在建造中のものが五隻あるとの話である。

内田は、世間では、無鐵砲な奴だと悪口するものもあるが、併し果斷猛進、而かも機宜を誤まらぬ識見には感服の外ないのである。彼れは、常に、人に向つて、予は將來のカーネギーたるべし。世界の富豪たらんと傲語して居ると傳へられる。或は夫れ、現代の一快男兒と云つて可なるか。

意志の人勝田銀次郎

明治六年、伊豫國、松山に生まれた人である。青山英和學校を卒業後、大阪

の吉田廻漕店の店員となつて貿易業に従事して居つたが、後、神戸の足立商店に勤め代へをして、此處で、他日雄飛の立脚地を築き上げたのである。

同人は不屈不撓の意志を有して居ると共に、仁俠熱烈の感情家である。性は頗る快活で、接する人をして、春風に對する感あらしめる。且つ、仕事に、常に、一生懸命であるのは、眞に、敬服に値ひする。曾て、明治三十三年の北清役後、はじめて獨立して海運界に乗り出したのであるが、其の猪突の性は、今次の歐洲戦役に遺憾なく發揮せられて、一昨々年チャーターの安價なりし時思ひ切つて船主と大契約を爲した。當時同業者は、大いにそれを笑つて、其の無謀の行爲を嘲つたが、同人は斷乎として所信を貫いた爲めに、遂ひに今日の巨利を博し得たのである。殊に近頃の活動に至つては、大いに他人の恐惶を惹起しつゝありと云はれるほどである。其の將來は、眞に潤目して見る可きも

のであらう。所有船は、白鹿丸、海福丸、御代丸、與安丸、永代丸の五隻壹萬五千七十九噸と、外に、チャーター船六隻とである。

三九四

義侠の商才廣海二三郎

海運界の故參であると共に、石川縣の多額納稅者でもあり、曾ては貴族院議員として、勳四等に叙せられて居る廣海二三郎は、若くして大阪に出で、奮闘努力して今日の富をなした人である。

今年、六十二歳の高齡ではあるが、今ま尙ほ矍鑠として壯者を凌ぐ有様で、同業者間では、太く推重されて居る。殊には、翁は義侠的精神に富んで居て、公共の事業には何日も眞先きに力を盡す人である、のみならず、後進の誘掖にはなかく骨を折つてゐる。今ま、海運界中で名を成して居る者で、翁の庇護

に待つた者は、甚だ多いと云ふことである。

翁は、人格に於て勝れて居るのみでなく、機を見る商才に於て、又た、一頭地を抜いて居るものがある。始めは、手狭く海産物商を營んで居つたが、日清の役起るや、其の所持の船舶を以て、一時に巨利を占めたのである。次いで日露の役にも大いに儲けた。更らに今回の歐洲戰亂に際しても、ますく、膨大となる一方である。所有船は、宇品丸、御吉野丸、御室丸、千島丸の四隻であつて、噸數、一萬千六百二噸である。

株界の雄將神田鐳藏

尾張國、海部郡、須成村の酒屋に生れた小供が、今の紅葉屋銀行の持主、株式界のバリ／＼、神田鐳藏である。

十七歳の時である、攝津國灘の本場へ小僧奉公に出された。こゝで三年間と云ふものを、股引きに草鞋穿きで、毎日、得意先を廻らせられたが、此の小僧、酒の造り様は一向に覺えないで、覺えたのは、唯だ掛引きばかり、掛引きは、なかく上手になつた。

かくて、年期を終つて故郷に歸るや、自ら水を汲み、火を焚き、無尻襦袢に紺の股引きといふ扮装で、數年間は大奮闘をして、村の酒屋として勉勵した。折柄名古屋市に、株式取引所が設立されたのである。備藏以爲らく、濡れ手で粟を握むは此の時である。當るも當らぬも、運一つだ。一つ運試めしにやつて見ませうと、僅かの金を用意して、名古屋へと出掛けた。ところが運がよかつた。大いに當つた。それに、日清戦争が勃發して、株式界は大いに景氣づいたので、儲かる一方となつた。

ところが、大得意の間は、東の間で、戦後、相場は、ガラ／＼と變動を來たして、備藏は着のみ着のまゝの姿となつた。かうなつては、國に歸るも耻しいとて、東京さして上つたのであつた。

上京すると、株の本場の兜町で、株式取引所の近傍で貸間を見付け、二階の三疊一間で自炊をしながら、仲買店の客引きとなつて働きたながら、百圓の貯金を作つた。之れを資本として、金の雨ふる兜町に、間口一間の屋臺店然たる六疊敷き一間の家に仲買店を開いた。

勿論、小けた店、振り返るものもなければ、同業者の間でも相手にはされなかつたものである。併し、こんな事に萎げるやうな男でない。得意なり知人を作ることに、一生懸命苦心した甲斐あつて、「店は小さいが堅いから」と云ふ評判を得るやうになつて、遂に今の盛大をなしたのである。

新聞雑誌の記者にチヨイ、小遣錢を與るお蔭で、世間に買被られて居るが、人間は下等だ。今は病氣で死に掛かつて居る、公共事業に寄附金をしたのは、何れも虚榮心と廣告法に過ぎない。

三六

藥成金田澤又右衛門

約二年間に二十萬圓の大儲けをしたと云ふ藥成金田澤又右衛門は、横濱の古藥店で、年を追うて店は凋落して行くと云ふ有様であつたが、渠れが、二十年前、某藥學校を卒業するや、試験を受けて藥劑師となり、外國人の經營になるヤーハローテ商會に雇はれ、爾來十五年間を同商會藥品部の部員として送つた。日露戰役の時などは、大いに敏腕を發揮して、同商會に儲けさせたと云ふことである。然るに、感ずるところあつて、數年前に同商會を辭し、獨

力で、小さな藥品輸入店を開いた。併し、何分、小資本を擁しての事とて、注文を受ける度に、マゴつくど云ふ状態であつたが、之れでは、思ふやうに商賣も出來ぬと考へ、遂ひに、山田某を説きつけ、日本橋伊勢町に二田商會を起した。いよく、これから發展を計らうといふ矢先き、此の度びの歐洲戰爭が勃發したから、藥價は暴騰するし、此の成行きを見越して買ひ占めを行つたのが大いに當り、遂ひに、彼の二ヶ年間に二十萬圓といふ巨利を博し得たのであつた。目出度い。

松昌洋行主山本唯三郎

坂齊正雪といふ、何んだか、講談物にでもありさうな變てこの名前の人が、茲に擧げた山本唯三郎の嚴父である。彼れは其の第三子に生まれ、養子に行つ

三六

て、山本家を繼いだのである。始め京都の同志社に入學して聖書やアーメンに日を暮らして居たのが、學校を卒業すると、何日しか財界に飛び出して、聖書は經濟書に代へられ、讚美歌は算盤珠に代へられた。

初めて財界に飛び出すや、先づ松昌洋行の一社員となつた。當時、社長は伊藤彦九郎であつたが、大いに其の技倆を認めて、之れを重用したから、月を追うて、月給は地位と共に昇つた。かくて彼れは、金儲けも巧いが、使ふことも巧いと言つて、社内、唯一の人氣男となつた。そして遂ひに濃厚なる伊藤社長を掌中に丸めて、松昌洋行を乗取つた事柄については世上の評もあり、伊藤氏の同情者も少くはないが、併し又た彼れが手腕の尋常でないことを證して餘りあるものでなければならぬ。

此の松昌洋行と云ふのは、支那に向つて材木を輸出する商賣をして居る會

社であつて、兼ねて開平炭を買ひ入れては、之れを内地に向つて輸入して居たのである。同洋行には、それを使用して居つた汽船が（同洋行の所有に係るもの）歐洲戦亂の突發して船舶不足の聲が高くなると同時に、其れ等の船に依つて、大なる金儲けをなしたのである。のみならず、船舶業の好望を豫想して、更らに他から十五隻を借り入れて轉貸したので、之れが大いに當り、同社の資本金六萬圓は、束の間に二十五萬圓に増資せられたのである。

彼れが此の成功を贏ち得るや、一萬圓を救世軍の山室大佐が經營して居る結核療養所へ寄附すると共に、先頃は、四千噸の汽船を三隻も川崎造船所へ注文した。

現在に於ては論ずるまでもなく、將來、最も屬望すべき海運界の巨星は、岸本汽船會社々長、岸本兼太郎であらう。其の所有船の噸數五萬九千六百噸（船數十五隻）にして、彼の東洋汽船會社などよりも、其の噸數に於ては優つて居るのである。

而して今度びの戰亂によつて贏ち得たる利益は、恐らく數百萬圓を下らぬであらうとの事である。従つて、其の富は一千萬圓以上に上つたのを疑はぬ。

兵庫縣の産で、もと有名なる金満家である。其の父に當る人が、此の方面の才があつた爲めに、大阪に出て、海産物や海産肥料の賣買に従事して巨利を博し、數百萬圓の財を作つた。其の血統を受けた岸本は、亦た海運事業に於て卓絶した才能を有して居るのである。

年齒漸く本年三十有八歳。まだ若いもので、之れから大いに働かうと云ふ分

別盛りである。尤も最初は小さい規模の汽船會社を經營して居つたが、機を見るに敏なる日露戰役當時、早くも御用船を引き受けて、大いに儲けた。爲めに一躍して、海運界の巨星となつたのである。性、高邁にして、摯實、我慢強い點に於ては、人々が驚嘆措く能はざるところである云ふ。

烟 敏 なる 岡 崎 藤 吉

岡崎汽船會社長、日本船主同盟會頭、神戸海上運送保險會社社長等の要職を占めて、關西實業界に重きをなして居る岡崎藤吉は、佐賀に生まる。

始め、國に居つた時は、村長などを勤めて居たさうであるが、一朝、志を立て、實業界に投じた。自ら同志を集めて酒造業を營む計畫をなしたが、事、殆

んど成らんとして不幸躓いた。それから、僅か五千金を懐中して、清國に渡つたのである。

清國は上海に渡つた。渡つて、暫くはちつと形勢を觀望して居つたが、所持金の徒消せんことを心配して、試みに汽船一隻を買ひ入れた。すると、天なる哉、日清戦争の勃發に遇うて、巨大の利を博したのである。

そして此の時、不十分であつたが、船舶業者の仲間入りをして歸つて來たのである。其の後、其の炯敏なる活動と、篤實に基く信用とは、渠れをして遂に今日の成功を收めしめたのである。

渠れは又た、我國の保險業が、幼稚なる爲め、海運業の發達の遅々たるを嘆じて、廣海二三郎等と相謀り、神戸海上運送株式會社なるものを設立し、現に、社長として此の爲めに盡して居る。我が海運界に貢獻せる功勞は、大なり

と言はねばならない。

不幸實子なく、甥の忠雄を入れて嗣子となし、忠雄は家業を助けて大いに發展の道を講じて居る。慶應義塾出の俊才で、温厚にして親切などの評がある。

其の富は、目下二百萬以上と云はれて居る。其の所有船は、合計十隻、二萬六千六百二十七噸である。

縦横の奇才山下龜三郎

縦横の奇才として、最も、世の注目を惹けるものを、山下汽船會社社長、山下龜三郎となす。彼れは卓犖にして霸氣に富んで居ると共に、最新知識と、更らに、其の設備とを有つて居て、盛んに活躍を試みつゝある。

彼れは伊豫國宇和島の産で、今年は、五十歳の働き盛りである。十六歳の時

十五圓を懐中して京都に出で、苦學をしたのが、今日あるの始めである。其の後、東京に出で、明治法律學校に學んだ。卒業後、大倉孫兵衛氏の店員となりて、商業の實際に就いての修業をした。そして三十歳の時、横濱に出で、横濱石炭商會を設立した。すると、日露の役が始まらんとする時、機を見る敏なる彼れは、早速、汽船二隻を購うた。ところが汽船の相場が以外に暴騰した爲め、思はざる巨利を占めたのが、船舶業に身を投ずる手始めであつた。

其の後、彼れは或る事で失敗して、一時は非常な悲境に陥つたが、其の内戦後の事業界に打つて出で、またく大いに活躍したが、此の時、百數十萬の借財を作つたが、彼れは毫も頓着しない。其の膽力と、努力とは、先輩、殊に伊藤公、澁澤男等に、奇才として認められ、其の庇蔭を受けて居たので、再び土を捲いて重來した。今や、海運界での飛將軍として旭日の天に昇るが如き勢ひ

である。英京倫敦に於ての船主としての名聲は、三井も、到底及ばざるものがある。と云ふことである。尙ほ、米國に向つても、今また大いに驥足を延ばしつ、あるところであつて、將來、眞個、望みを屬すべき第一人であらう。併し今度の船舶管理令には少々參つたと見える。所有汽船、合計十四隻、噸數、三萬七千百〇十五噸、外に、チャーター船九隻ある。

白鹿の醸造元辰馬吉左衛門

由緒ある舊家として、また、現に多額納稅者として、名聲兵庫縣下を厭して居る辰馬吉左衛門は、一面、船主として我國に有名なる一人である。

同人は徳望の人で、西宮銀行頭取、神戸海上保險會社の取締役の如き其の他の諸會社に重役に推されて居るものが少くない。攝津國、西の宮の産、今年四

十九歳。

以前より酩酊酒「白鹿」の醸造元として、天下に名を知られて居る同人は、もと酒を輸送の目的で、船舶を有つて居たのが、何日しか、船に趣味を有つ事となり、遂ひに船主として今日の大をなしたのである。其の富、八九百萬圓以上と稱せられて居る。所有船十二隻、四萬八千六百六十一噸である。

明敏周密の山本善助

鳥取縣の生れである。元と、山田の姓を名乗つて居つたが、山本家に養子となつてから、山本氏を冒したのである。山本汽船合資會社社長として、回漕業に従つて居る傍、播磨造船株式會社を經營して居る。明敏周密の才は、事に臨んで、よく、其の機を逸せず、誤まらず、造船、回漕の二業共に、發展著し

く、遂ひに今日あるを致したのである。其の富は正味百五十萬以上と呼ばれて居る。

但し戦争前までは、僅か三隻の汽船を有するに過ぎなかつたが、今次の歐洲戰亂に際して、適宜の措置を取つて、此の巨利を得たのである。明治七年三月十八日呱呱の聲を揚ぐ、即ち今年四十二歳と云ふ働き盛りである。將來、有望者の一人として世間から矚目されて居るのである。

剛膽なる乾新兵衛

我國に船主も随分あるが、其の持船の總てに保険を附けないのは、海運界の奇傑として、其の名を世間に知られて居る乾新兵衛一人である。

一昨々年、其の持船「十一乾坤丸」が沈没の悲運に遭遇した時、流石の新兵

衛も、非常な心配をした。何を云つても、三千五百噸で、時價、三十萬圓の船であるから、其の心配したのも、決して無理ではなかつた。そこで、伴が、それであるから平素から保険を附けて置く方が善いではありませぬかと云ふと、親爺曰く、「否なく、悲みは悲しみて別のもの、商法上の見識は、商法上の見識で亦た別のものである。自分は何うしても保険はつけない。其の理由は、自分の持船は、能く注意がしてあるから、決してこんな事は二度とない。たとひ、有つたところで、過失と保険料とを差引くと、保険を附けない方が矢張り得策である。」と。此の一事で其の人と爲りが、略ぼ知られやうと思ふ。其の剛膽には、同業者でも驚かぬ者が無いと云ふことである。所有船は七隻、二萬二千九百七十九噸。

新兵衛は別に明治信託株式會社々長でもある。以前前田氏と稱して居つた

が乾家に雇はれて居た時、忠實にして、且つ伶俐なるを見込まれて、遂ひに、乾家の女婿に選ばれたのである。乾家は元來、酒造業が本業であつたが、併し單に、酒造業で満足せず、豪快の天資を以て、大いに奮勵して家運を拓いたのである。謙遜にて、人に下り、且つ、名を好まずして、一に業務の擴張に力を盡して居るところ、まことに當代の傑と謂はねばならぬ。

霸氣満々の上西龜之助

播州の人である。性質磊々落落、風采堂々、身量三十貫の肥大漢である。はじめ慶應義塾に學んだが、半途にして退學し、身を株式界に投じた。彼れは、實に霸氣満々で、多年轆轤不遇の地位にあつたが、一旦、神戸に來つて、海運界に投ずるや、計略、大いに圖に當り、着々堅實なる基礎を築きつ

つある。其の奮闘振りには、快刀で亂麻を断つが如く、なか／＼鮮かなものがある。今年丁度五十一歳、悪戦苦闘を續けしに似合はぬ程、人物は圓滿な方である。それに、襟度は豪快で、決して、凡物と伍する男でない。且つ信仰心極めて厚く、曾て久しく須磨邊の一孤寺に寄寓して、精神の修養を志して居たこともある。

彼れは又た甚だ友情に厚く、十年、二十年の前に死んだ知己の命日を、悉く暗記して居つて、「何がしの何年忌を替み度いから出席を乞ふ」とて、當年の交遊に招待の書面を出して、懇ろに法要を替みほごであるとのこと。而して現在の持船は三隻で、六千二百七十六噸と、外にチャーター船一隻とである。

附言一 金儲を提供せしむる秘策

寧ろ他に一路を開拓せよ

明治三十七八年日露戦役後の我國經濟界の異常なる發展に連れて種々の新設會社が簇生したとは諸君の知らるゝ通りであるが、當時に於ては所謂權利株なるものが大變に流行して、實業ならぬ虚業家が一大飛躍を試み、財界の一大混亂時代を現出したのであつた。而して斯くの如き潮流に乗じ巧妙に游泳したる者は、敢て別に勤勞とか、努力とか云ふ要素を缺いて居ても、只單に一寸した呼吸を會得し巧みに立ち廻つたが爲めに、遊んで居て莫大な資産を築き上げたと云ふが如き決して其の例に乏しくない。更に甚だしきに至つては無一物の素寒貧が待合を根城として巨萬の富を擱んだ實際談さへある。其の誰々なるかは

我輩の此際指摘するを好まぬ處であるが、兎も角も世に云ふ辣腕家であつて金儲けの上手な人間と丈け云つて置かう。

而して彼等の採り來りし手段と方法とは抑も如何なるものなりやと云へば、彼等は盛んに何處其處の金山にて儲けたりとか、兜町にて勝利を獲たり杯と稱し、或は新聞記者を買収し或は興信所員を籠絡し、以て策略を弄し極めて恠口に立ち廻つた譯である。それを其の後に於ても否現在に於ても此の故智を學んで居る者が其處彼處に仄見える。併しながら之れ等の事は何人にも適用されるものでないのみならず、本當の成功を收めんと期する上、宜しく他に一路を見出して、之れを開拓することを忘れてはならぬ。

誠は成功に導く唯一の要素

其の一路とは何ぞや、曰く誠の人となる事是れである。今や舉世滔々、誦詐奸佞、虚偽扮飾の風、上下に瀰満し、誠を以て終始進退する者は甚だ稀である。惟ふに誠の力程強大なるものはないであらう。實に誠は人を成功を導く唯一の要素である。誠なき者は將來必ず滅ぶの時機到來するを疑はぬ。金儲けに於ても此の一大自然律を免かるゝことは出来ない。想ひ起す明治四十三四年の夏日、當時の外務大臣小村壽太郎侯は、現式部官にして當時の秘書官吉田幸作の名を以て我輩を其の官邸に招き、話の序でに我輩の將來を切に訓戒し誠の一字に就いて縷々温情に富める談話を試みられた事がある。彼のポーツマウスの講和締結後に於ける候に對する我が國民の怨嗟の聲は可成り猛烈なものであつたけれども、日ならずして一般の了解を得且つやんごとなき邊りの御信任いと厚かりしも亦故ある哉と思はしめたのである。

斯くの如くにして彼は誠の人なりとの正札を張られたならば、商家には顧客の蟬集する事疑ふべからずであつて、俸給生活者にありては雇主は相競ふて聘信せんとするなるべく、金儲けの相談に預るべき機会も従つて多いであらう。又獨立してゐる人ならば或は有利事業に對する出資を慫慂せられ、乃至は事業經營の謀議に與へる機会が極めて多いこと、思はれる。即ち我輩の所謂他から金儲けを提供させる秘策と云ふのは是れである。

沈黙は成功なり

此の外に未だ一つの策がある。米國にスタンダード・オイル・コムパニーと云ふ會社がある此の會社の社員は服膺する一句がある。夫れは「沈黙は成功なり」と云ふ事である。我輩の如きは喋舌るのが商賣であるから仕方がないが、諸君

は須らく沈黙の人となつて欲しい。即ち口は禍の門と云ふ諺のあるが如く、過言多辯の人は屢々失敗を演ずるものである。従つて他人が警戒する、油断をしない。爲めに耳に入るべき事も入らず、當然知るべき事も知らぬと云ふやうな事が多い。諸君は希くは沈黙寡言の人となり、以て速かに成功の要諦を獲得せられんことを望んで止まないものである。

附言一 「ス・ヘキユレーション」や「ヤマ」

山師とは何ぞや

投機と言ふことは、所謂相場の意義に外ならぬ。けれども、若し廣義にこれを説く時は、人事凡て投機ならざるはなく、相場ならざるはなしである。若し嚴格に論ずる時は、人間の行爲は、大小と輕重の差こそあれ、何れも皆投機な

らざるはなく、相場ならざるはなしと云ふを妨げぬ。随つて、全然其等の觀念を超越して、事業に成功することは、難かしいと云つて差支えない。而して更に狭義の投機、又は相場を試みるのも、或る場合に於ては、常に排斥すべきでないと共に、寧ろ大に進んで、之れを斷行しなければならぬ場合もあると信ずる。

さて世に山師なる語が存在する。之れは元彼の鑛山師など云ふ輩が、未だ眞の見込も立たず、果して何れ丈の成績が擧がるか否かと言ふ見當も付かずして、否夫れのみでなく身には殆んど半銭の貯蓄もなくして而かも纏ふに美服を以てし、指には偽ダイヤの光りを輝かせ、口では人を煙に捲くが如き大風呂敷を擧げ、出任せの可い加減な文句を列べるのが彼等の常態である所から、始まつたものであらうと察せられる。處が此の頃では、縱令本物の山師ならずとも

少しく風變りな行動に出づれば、人は之れに對して山師の呼稱を與へるのである。例へば此處に一人あり、何等計上すべき資金の用意をなさず、加之も能く或る種の事業を經營し、一廉の成功を收むるとせんか、否よしや成功は收め得ざるも、堂々の陣を張りて濶歩するありとせば、人は即ち奴は山師なりと貶す傾向はありはせぬか。然し乍ら此の觀察は、蓋し大なる誤謬でなければならぬ彼れが其の今日あるに至したるは、固より一種のヤマたるに相違はないけれども、其の裏面には、資金に代ふるに、信用の貯蓄あるを知らねばならぬ。周圍の後援は之れなからんも、然も頼むべき腕あり、頭あるを思はねばならぬ。

遣り繰りは不正に非ず

資本の運用と云つても、種々あるが、一萬圓の金を以て一萬圓の仕事をする

ならば、それは毫も驚くに足らない。子供でも婦女子でも老人でも、少々馬鹿でも尚ほ且つ出来得るが、夫れでは餘りに曲がなさ過ぎる。茲に於て、一萬圓の金を以て二萬圓の仕事をして、或は三萬圓或は五萬圓十萬圓の事業を遣り遂げてこそ、初めて面白い結果が收められる譯ではあるまいか。是れが所謂遣り繰りなるものである。而して此の遣り繰りなるものを、世人は一概に不正のものごし、乃至は詐欺に類するものごまで極言するは甚だしき誤りである。若し斯くの如き筆法を以てすれば、資金を活用すると云ふ活用の二字は、甚だ無意味なるものごとなるではなからうか。而して資金活用の手段方法に至つては、多々之れあるべきも、信用の利用の如きは、其の最たるものであらねばならぬ。語を換へて言へば、借用資本を巧みに取扱ふの手腕ある人は、即ち投資にも特殊の能力を備ふる人である。

以上を約言すれば、投資の十分なる実績を擧げんとするに當つては、宜しく臨機應變の措置に出で、時には所謂ヤマを張るのも亦た甚だ妙であると思ふ。

成 金 術 畢

大正七年拾月拾五日印刷
大正七年拾月拾五日發行



不許

複製

著者
發行所
發行所
印刷所
印刷所

後發成金術

正價金壹圓六十錢

岡本
東京市芝區受谷町貳丁目壹番地
鈴木一
東京市神田區錦町壹丁目貳番地
安西
東京市麹町區有樂町貳丁目壹番地
吉原良
東京市麹町區有樂町貳丁目壹番地

學平清三社

發行所
大賣捌所

東京市神田區錦町一丁目二番地
振替東京四〇五〇四番
東京市神田區表神保町三番地
振替東京二七〇番

大修館書店
東京堂書店

大 賣 捌 所

東京市京橋區元數寄屋町
 東京市京橋區銀座三丁目
 東京市京橋區銀座三丁目
 東京市日本橋區通一丁目
 東京市日本橋區數寄屋町
 東京市日本橋區數寄屋町
 東京市日本橋區大傳馬町
 東京市日本橋區本石町
 東京市日本橋區鐵砲町
 東京市日本橋區今川橋
 東京市神田區裏神保町
 東京市神田區裏神保町
 東京市神田區裏神保町
 東京市神田區表神保町
 東京市神田區錦町一丁目
 東京市神田區錦町二丁目
 名古屋市中區下長者町
 大阪市東區北久寶寺町四丁目
 久留米市米屋町
 札幌區南一條西三丁目

富菊藤川勉二中上三大文至文大六大春東北
 貴竹谷 強松西田省洋盛誠林 合 祥海隆
 瀨 阪 倉
 堂金崇 堂堂屋屋堂堂堂堂 館 堂堂館
 書 書 書 書 書 書 書 書 屋 書 書 書
 書文文 書書書書書書書書書 書 書書書
 店堂館店店店店店店店店店店店店店店店店店

386
3

終